あかちゃん
からの
手紙

げんじあきら

目次

〇わたしは呼吸をしている

〇お母さんと離れてしまった

〇誰かれとなく触ってくる

〇地面に貼りつけられて

〇わたしの主体は腸管なのに

〇免疫寛容ではないわたし

〇お母さんの匂いだけが頼り

〇味も感じられる

〇おっぱいが出ないかもしれない

〇体重が７％少なくなった

〇どうしておっぱいが飲めるのだろう

〇お母さんのおっぱいは免疫寛容だから

〇おっぱいのホントの役割

〇豆腐は柔らかいから

〇お母さんの乳首が黒くなる

〇お母さんとわたしの身体のコラボ

〇鼻でしか息ができない

〇おっぱいを飲みながら呼吸ができる

〇どうして海から揚がったのだろう

〇わたしのコンセプトは生き残ること

〇おっぱいを飲むこと以外何もできない
90日目だ

〇おっぱいしか口に入らない

〇よだれがやたら出る

〇口の改造

〇おっぱいを飲むと眠くなる

〇身体が固くて丸い

〇わたしの泣き声

〇夜泣き

〇わたしのなみだ
生まれて１５０日になった

〇喉を下に伸ばすように指示された

〇おっぱいにむせる時がある

〇飲み込む

〇口でも息ができるようになった

〇口から声が出る

〇首が長くなった

〇おっぱい以外の食べ物を食べた

〇離乳食

〇お母さんのおっぱいは変化する

〇寝返り

〇体重が毎日30ｇ以上増えている

〇おむつを替えてくれ

〇豆腐を食べるとヤバイ

〇ハイハイをはじめた

〇どうして立ちあがったのか

〇ボーロを自分で食べた

〇夜眠れるようになった

〇はらまき

〇熱があるんじゃないか
生まれて２４０日になった

〇どうして歯が生えるのか

〇わたしはスリッパが好きだ

〇おっぱいを飲まなくなった

〇人みしり

〇ミッキーマウスのように
１才になった

〇プールで泳いではじめてわかった

〇どうして陸に上がったかわかった

〇わたしの生き残るコンセプト

〇手が５円がわかるようになった

〇丸で柔らかいもの

〇手は頭脳の代理をやっている

〇まだ遠近がはっきりしない

〇お母さんをお手本にしている

〇歩くリズムを間違わない

〇小指はバランスの指

〇ローリング

〇わたしは自分で育った

わたしのながい旅

○旅がはじまった

今日は胎盤を自分をコピーしてつくらないといけない。
まだわたしはホントに小さい。
みんなわたしのことをよくわかってはいない。
わたしは、わたしになった時から忙しいのだ。
おかしなことに、わたしが育つのに、お母さんは何もやってくれない。この子宮と言うらしい場所を貸してくれるだけだ。父親などは、さっぱりわからない。いるのかいないのかすらも、わからない。
今日から、私は旅をする。ながい旅だ。
わたしは水に中にいる。
はじまったらしい。
自分がどんどん変化している。ものすごいスピードだ。わたしの遺伝子はこれではすごい忙しい。瞬間瞬間にリライトしていかないといけない。自分でもどうなっているのかよくわからない。
はじまったらしいだが、わたしがボタンを押したからはじまったわけではない。おかしなことなのだが、カミサマがいるとしか思えない。すごいスピードでわたしは変化している。多分、わたしは、海にいる生き物だ。誰がわたしを変えているのだろう。お母さんは、多分、何もわからないだろう。
この実像を誰も見たことがない。多分、ＣＧだとみんな言うだろう。
わたしは、自分が変化する旅を任せるしかない。どういうわけだか、決まったシナリオがあるようだ。誰がこの旅のシナリオを描いているのかわからない。

○お母さんから食べ物をもらっている

かなりの時間が過ぎた。わたしは身体が大きくなっているが、わたしが何者であるのか、よくわからない。海の生き物ではないかもしれないと思いはじめている。胎盤も大きくなった。胎盤はわたし自身だ。わたしは、自分で自

分を守っている。多分、お母さんは、何もわからない。
知ってくれていたら、もっと静かに過ごすのだろう。今日も、朝からすごく揺れている。お母さんをアテにしていたらわたしを守れない。
もうこれだけ大きくなっているので、お母さんから栄養をもらわないとどうにもならない。わたしも生き物だから、何か食べないと生き抜けないと思うのだが、この場所には、何も食べるものがない。自分をコピーして胎盤にしているので、お母さんから栄養をもらうことができる。
最近、お母さんからもらう栄養が不足している。どういうわけだか、ビタミンが少なかったりする。お母さんは、自分のビタミンを削ってもわたしに送るのだろうから、お母さんの身体が心配になる。わたしを産み出すまでは、身体を大事にして欲しい。わたしは、自分で育ってはいるが、栄養は、お母さんからもらっている。
カルシウムだって同じだ。わたしは、カルシウムが不足すると、わたしの細胞分裂に支障が起きる。わたしの細胞に、カルシウムは欠かせない。わたしは、わたしの細胞のカルシウムのために、骨にカルシウムを蓄積している。わたしは、ガンガン大きくなっている。骨だって、カルシウムが不足している。
もしかして、お母さんは、わたしがお腹の中にいることに気がついたのかもしれない。わたしが、お腹の中にいても、お母さんは気がつかないことが多い。それくらいに、お母さんは、何もわからない。
最近いっぱい食べるようになったと感じてくれればいいのだが、気分が良くないから食べないとかになると、最悪である。それならまだいいが、ダイエットしないといけないなどと、おかしなことを言い出されると困る。
わたしのことがよくわからないから、いいかげんだろうと思う。
お母さんにお願いしたいが、ことばが通じない。最近デブになってきたことを気にしないで欲しい。だから、少し食べるのを減らすなどと思わないでほしい。それでなくても、ビタミンが足りない。カルシウムも亜鉛も鉄も足りない。ビタミンミネラルが足りない。
わたしが足りないと言っているのだから、お母さんの身体は、もっと足りないはずだ。自分の身体よりわたしを優先しているだろう。
ごはんをいっぱい食べれば、ビタミンミネラルも当然多くなる。ダイエット

などやっていると、食べる量が減って、ビタミンミネラルが減ってしまう。微少栄養素だ。あたりまえだ。
わたしの遺伝子は、わたしが高速で変化しているのですごく忙しい。わたしは今シッポがある。多分、もう少し時間がたつと、わたしのシッポはなくなる。
新しいわたしが、次々に誕生している。
わたしは、どうしてもビタミンミネラルが欲しい。高速で変化しているわたしの遺伝子のためだ。
わたしの遺伝子は、タンパクは必要だが、タンパクが少ないお母さんはいない、それよりも、わたしの遺伝子にマークをつける、難しい作業をする時に欠かせないビタミンなどが不足しがちだ。このマークがうまくいかないと、わたしのシッポが消えない。わたしが、シッポがあるまま生まれても困るだろう。かわいいからグッドだとは、お母さんは思わないだろう。
わたしのこんなリスクを、お母さんに知らせる術がない。すごく残念だ。
わたしは、少しのミスも許されない旅をしている。ミスが少しあっても、わたしの旅は行き着かない。もっと協力してほしいとは思う。

○どうしてわたしは旅をするのか

わたしの、少しのミスも許されない旅は、どうしてだろうと考えてしまう。ながい旅なのだ。わたしは、すごいスピードで変化している。今もだ。リスクが大きい。しかし、多分、お母さんとお父さんの今の状態からわたしがはじまったら、どうにもならないだろう。
私は、お母さんとお父さんから遺伝子を受け継ぐ。しかし、ここまで生きてきたお母さんやお父さんの遺伝子を受け継いだら、とんでもないことになる。
あまりにも、傷が多いし、理にかなわない生き方をしていて、おかしな遺伝子になっていることだってあるだろう。多分、ここからはじまったら、わたしはイヤだ。わたしはわたしの人生であって、お母さんとお父さんの人生を引き継ぎたくはない。
こんなことは言いたくはないが、ずっとタバコを続けているお父さんの遺伝

子など、継ぎたくはない。わたしの望みだ。多分、わたしの望みは、普遍になっているようだ。すべてのあかちゃんの遺伝子は、ゼロクリアーされるようだ。生き物の最初に戻る。基礎的な部分を残して最初に戻る。基礎的な部分とは、お母さんとお父さんを受け継ぐ部分のことだ。これがないと、生き残れそうな人間をより多く生き残せなくなる。わたしの遺伝子は、傷つかない基礎的な部分と、生きていると傷ついて、引き継ぎたくない部分を、読める。

わたしは、人として進化してきた。

わたしは、ゼロクリアーしているので、わたしは、人が生き物になった最初からはじまる。

こう考えると、わたしが、すごいリスクを負って、生き物の最初から高速変化することが納得できる。わたしの遺伝子は、お母さんやお父さんの遺伝子が、ボロボロであることを、よく承知している。多分、ここは安全だが、外に出ると、わたしの遺伝子が、ものすごく傷つくような出来事が多いのだろう。

○わたしとミトコンドリア

わたしは、酸素がないと生きられない。わたしではなくて、わたしと共生しているミトコンドリアだ。わたしは、いまだに、ミトコンドリアがわたしではないかと思ってしまう時がある。お母さんの赤血球が調子が良くない時は、わたしは、どうにもならなくなる。わたしのミトコンドリアが死んでしまったら、多分、わたしも死ぬ。だから、わたしは、ミトコンドリアではないかと思ってしまう。

もう、わたしの細胞は、数兆個はある。生まれ出る時までには、10兆とかになるのだろうか。お母さんとお父さんは60兆個だった。

わたしの細胞に、ミトコンドリアが棲んでいる。隠れて潜んでいるわけではない。ウイルスだから、なにかの細胞の中でしか生きられない。多分、お母さんより、わたしのミトコンドリアは多いだろう。１つの細胞の中のミトコンドリアの数のことだ。１つの細胞に、10数個から１０００個なのか匹なのかわからないが、いる。

どうして酸素がないと生きられないミトコンドリアと一緒に暮らすことになったのだろう。酸素は、わたしにとっては毒である。わたしをボロボロにする。
しかし、この地球には、酸素がない場所などないのだろう。地球で生きるためには、どうしても、酸素を食べて生きているミトコンドリアと一緒に暮らさないとダメなのだろう。
これが、けっこうメンドーだと、わたしは思う。
わたしは必要ないのに、お母さんから、ミトコンドリアのために、酸素の供給を受けないといけないからだ。リスクがある。
わたしは、お母さんより生き残らないといけない。生き残るには、体温が高いことが大事だ。ミトコンドリアは、エネルギーを発する。呼吸をしている。酸素をが必要だ。お母さんの赤血球がダメな時に、わたしがハァハァ言っているのではなくて、わたしのミトコンドリアが、ハァハァ言っている。
わたしの体温は、37度近くもある。多分、わたしが生まれ出る所も37度くらいだから、わたしは37度なのだろうか。そしたら、ミトコンドリアが、ガンガン熱を出す必要もないように思える。生まれてみないとわからない。
それにしても、ミトコンドリアの執念はすごい。
どうしても、地球上で生き残りたいのだと思う。わたしなど、ミトコンドリアに較べたら、執着心が足りない。わたしだって、最近、エラが変化して肺ができてきたのではないかと思う。わたしの酸素を吸収する方法が変化してきている。海で生きていると、エラで酸素を吸収するらしい。エラが変化して肺になっているが、わたしが生まれ出る所は、水ではないのだろうか。不思議である。
それにしても、わたしの身体を、次々に変化させるミトコンドリアのプレッシャーはすごいものだ。わたしは、今は、お母さんの赤血球を通じて酸素を得ている。わたしは、わたしのミトコンドリアのために、作業を欠かさずやっている。
赤血球なるモノを開発させたのも、ミトコンドリアのプレッシャーだろう。
細胞は、身体の隅々にまであるのだから、血管を通じて、赤血球で酸素を送ることがグッドだ。

最近、お母さんは、暑がっている。私がいるから暑いのだろう。わたしの体温が、お母さんの本当の体温だ。お母さんにとって最も大事なものはわたしだ。生き物は、そのようになっている。だから、生き物は後に繋がる。
わたしと私のコピーである胎盤をひっくるめて、かなりの大きさになった。37度くらいある。お母さんは暑いだろう。
だからといって、時々、ものすごい冷たいものが、子宮の近くに入ってくる。多分、冷たい飲み物を飲んでいる。アイスクリームというものもあるらしい。わたしは、しばらく動かない。わたしは、寒いと動けない。わたしではない。わたしのミトコンドリアが寒さに弱い。よくわからないが、子宮の外は、37度くらいだろう。しかし、もし10度くらいであっても、子宮までは、伝わりにくそうだ。壁がありそうだ。しかし、大量に冷たいものが子宮の近くに入ってくると、いきなり、わたしも寒くなる。
わたしはよくわからない。
冷たいものを飲んだり食べたりすると、おいしいのだろうか。気分がいいのだろうか。お母さんがよくわからない。
それとも、わたしの温度が37度より高くなっているのだろうか。そうは思えない。ひょっとすると、お母さんには、わたしのことより、もっとわかりやすいことがあるのかもしれない。わたしのことは、お母さんにはわかりにくい。

〇ミトコンドリアはお母さんから

今も、わたしは、旅をしている。休むことがない。どこかで、この旅は終わるのだろうか。それとも、ずっと旅をしているのだろうか。
わたしのミトコンドリアの話しのついでに、わたしが不思議に思っていることを考えておこう。
わたしのミトコンドリアが、どうして、お母さんからしか来ないかだ。
お父さんには、ミトコンドリアがないのだろうか。
わたしは、なんでも、お母さんとお父さんから、半分半分もらってきている。あたりまえだ。
しかし、ミトコンドリアだけは違うのだ。

ミトコンドリアは、ウイルスで膨大な数がいて、脂肪を燃やして熱を出している。その時に、酸素が欠かせない。フツウに言えば、ミトコンドリアが多ければ、脂肪は、たくさん消費されることになる。ただ、暑がりだろうが。
今も、考えている。どうしてお父さんからミトコンドリアが来ないのか。お父さんのミトコンドリアは、ダメなのだろうか。お父さんのミトコンドリアだって、お母さんからすべてきている。ダメなわけがない。
これはなんなんだ。
ながい旅のついでに、少し考えてみよう。わたしが、これからずっと一緒に生きていく、ミトコンドリアのことだ。
わたしは、ミトコンドリア次第だと思っている。わたしの健康のことだ。わたしが元気で、これから生きていけるかどうかは、ミトコンドリア次第だと思っている。お母さんからしか来ないミトコンドリアだ。
多分、男の生き方は、ミトコンドリアにワルさをするのだろう。だから、男のミトコンドリアを、わたしには移さない。カミサマはそうした。それだけのことだと考えた方が、無難だ。男の生き方はミトコンドリアには不利なのだろう。人を生き残らせるには、男のミトコンドリアを移してはダメだ。わたしの想像に過ぎない。
生まれてみないとわからないが、ひょっとすると、女の方が、長生きなのかもしれない。これもわたしの想像だ。わたしは不思議なのだ。どうしてわたしのミトコンドリアは、お母さんからしか来ないのか。わたしが女であるのか男であるのか、わたしもまだわからない。

〇わたしは免疫寛容

わたしが生きていられるのは、免疫があるからだ。お母さんも同じだ。お母さんなどは、免疫だけでも完璧だったら、遺伝子のコピーミスがあってガン細胞ができても、おかしなウイルスや細菌が身体に侵入しても、免疫が喰ってくれる。
身体とは、そうなっている。わたしよりお母さんの方が、免疫では大事だ。。
わたしも、生まれてみないとわからないが、なかなか、免疫を完璧な状態に

できるような暮らしをすることは難しいらしい。
飲み会などというアルコールをたくさん飲む会もあるらしい。わけがわからない。おかしな煙を吸う道具もあるらしい。とにかく、完璧な免疫を保つことなど難しいらしい。わたしは、まだわからない。
わたしは、まだ免疫寛容状態だ。関係はない。
完全な免疫とは、身体の中のダメな部分を消し去ることだ。
わたしには、身体の中のダメな部分が皆無なのだ。今皆無だけではなくて、そもそも、身体の中に、ダメな部分ができないように、仕組まれている。子宮で過しているからだ。
身体にダメな部分ができるのは、酸素に殺られるか、紫外線に殺られるか、地球の重力に殺られるかだろう。しかし、子宮は、水の中だから重力が少なく、紫外線はないし、酸素もない。しかも、細菌やウイルスが入りようがない。封鎖されている。
免疫があっても働く場面がない。
子宮で暮らすことは、ダメ細胞をつくらないことでは、これ以上ない、完璧な環境なのだ。深海に似ている。水の中で紫外線が届かず酸素も薄い。
わたしは、免疫寛容だ。
免疫の機能はあっても、わたしの免疫は働かないようになっている。そういう状態のことを免疫寛容と言うらしい。
わたしは、全身免疫寛容だ。当然、わたしがコピーした胎盤も、免疫寛容だ。
お母さんに免疫が働かなかったら、１週間でガン細胞が大きくなるだろう。侵入したウイルスや細菌が増殖するだろう。
早い話しが、そういうのを、病気になったと言う。
免疫が働かなかったら、お母さんは、１週間で病気になるだろう。毎日、お母さんは、遺伝子がコピーミスしたおかしな細胞を、欠かさず、サーチして、印をつけて、壊さないといけない。多分数千個は、毎日あるだろう。ガンだ。
それに較べて、わたしは、免疫寛容なのだ。免疫機能はあるが働かない。もし、わたしにウイルスが侵入したら、私は、助かる手立てがない。それほどに、子宮とは、すごいところだ。宇宙船が壊れないのと同じだ。宇宙船が少

しでも壊れたら、宇宙飛行士は、数秒も生きられない。
私は、生まれ出るまで免疫寛容だ。わたしは、生まれ出るまで、細胞分裂しかしない。大きくなるだけだ。高速で変化するだけだ。こんなに忙しいのに、免疫などが入ってきたら、とても処理しきれない。
わたしと同じ環境にあると思われる深海の生き物も、免疫寛容の生き物が多い。免疫が働く必要がない生き物だ。免疫が働かないという意味は、全く、変化しないということでもある。
私がいま、高速で変化しているが、そのこととは異なる。私は、わけあって変化している。
深海の生き物の多くは、ずっと免疫寛容で、細胞分裂しかしないのだ。死ぬまで大きくなることしかしない。姿カタチが変化することもない。数億年も、同じ姿をしている深海の生き物もいる。
深海の生き物と胎児時代のわたしは、免疫上では、同じなのだ。しかし、わたしは、生まれ出る。生まれ出たら、多分、のんびりしていられない。細胞が、ガンガン潰される。地球と戦わないといけないのだろう。

○ながい旅を終えたのかもしれない

わたしは、ながい旅を終えたのかもしれない。高速で変化していたのに、ゆっくりになった。電車が止まってしまいそうだ。多分、わたしは、何事もなく、ながい旅を終えそうだ。
ホントは、お母さんにも、わたしの長い旅を知ってもらうと、少しは協力してもらえるかもしれない。協力するといっても、なんだろう。
ごはんをいっぱい食べて欲しいことだろうか。特にビタミンミネラルだ。
飛んだり跳ねたりは、少しは、ガマンしてくださいなのだろうか。
そんなことより、もっと大事なことがあるだろう。
お母さんが健康ではなくなったら、わたしが一番困る。酸素がキチンと来ないかもしれないし、栄養のバランスがワルクなるかもしれない。
わたしが、お母さんに、元気な生活をしてくれと言うのは、おかしいかもしれない。でも、お母さんが元気な生活をしていてくれることが、わたしが、長い旅を、なにもなく終える、最も大事なポイントだろう。

わたしは、安全な子宮の中にいるのだ。酸素もなく、紫外線もなく、重力も少なく、細菌やウイルスはゼロだ。わたしが、自分の旅で、苦しむことは、考えにくい。
やっぱりお母さんだ。子宮を抱えている。わたしに、酸素と栄養を供給している。
夜遊びしないで早い時間に横になってほしい。細胞を壊すのは重力だ。地球だ。わたしがいるおかげで、お母さんは、重くなっている。フツウよりも、細胞が壊れる可能性が高い。壊れるのは仕方がない。免疫があるから大丈夫だ。ただ、横になってないと、また細胞が壊れる。横になることは、地球と平行になることだ。お母さんが横になっている時に、お母さんの壊れた細胞は、新しい細胞になる。
落ち着かないからといって、立ちっぱなしでいないでほしい。
わたしが言うべきことではないが、お母さんは、よくわからない。お母さんが危ないと、わたしが危ない。
何度も言うが、出産後もカッコ良くしておきたのはわかるが、わたしは、高速で変化している。わたしは、ビタミンミネラルが欠かせない。
わたしは、お母さんは、ホルモンの関係で、わたしがお腹にいる時か、わたしにおっぱいをあげている時が、最もオンナっぽいのではないかと思う。
思うじゃなくて見える。
もっと自信を持って元気な生活をしてもらいたい。
どういうわけだか、わたしがお腹にいる時のお母さんは、自信がなさそうだ。心配事が多そうだ。
多分、わたしのことが、よくわからないからだろう。
わたしは心配いらない。わたしは、子宮という、地球上で、最も安全な所にいる。そこで、ながい旅をした。心配はいらない。心配だったら、わたしに、頻繁に話しかければいいだろう。わけのわからない、獣のような声を出すが獣ではない生き物に話しかけないで、わたしに、話しかけてほしい。
わたしのことがよくわからないから心配するのだったら、最近は、３Ｄエコーなるものもあって、わたしを、外からデフォルメして描いてくれる装置もある。わたしを見たら驚くだろう。お願いだから、わたしの旅が終わってからにして欲しい。わたしには、まだシッポがあったりするから。小さいか

ら映らないかもしれないが。
わたしの長い旅は、わたしが必ず通らないといけないことだし、リスクが高いことだ。音楽でも聞いて、ゴロゴロしておいてほしい。しかし、お母さんは、わたしが高速で変化している時でも、毎日出かけている。
なにかがおかしい。
わたしが、長い旅を終えて、リスクが少なくなってから、お母さんは、ノンビリしているように思える。
これなんだろう。

〇耳が聞こえてきた

最近、頭の横から、何かが聞こえる。しかも、どこからか、声がするようだ。だれかが教えてくれている。生まれ出たら、すぐに喰われてしまうかもしれないから、喰われてしまいそうな獣の声を覚ろと教えてくれている。
鼻から絞り出すような唸り声だ。お腹が空いている時の声らしい。わたしを食べたいらしい。なんとも気味の悪い声だ。
鳥の羽音にも注意しろと教えられた。生まれたばかりのわたしを、連れて行くらしい。
狼の遠吠えも覚えた。
これはタイヘンなことになってきた。
わたしの旅は、高速ではなくなってきている。スピードが鈍ってきている。しかし、何か、おかしなことをやっている。
狼の遠吠えを聞かせてくれと言ったのだが、今はできないらしい。どういうわけだか知らない。
これでは学習ができない。シミュレーションをやるだけなのか。
最近、すごい音が聞こえるようになった。ドックンドックンという大きな音と、何かが流れる音だ。水道管に速い水が流れているような音だ。血液らしい。
最初はビックリしたが、今は慣れてきた。
もう、生まれ出る準備をしているようだ。わたしの姿がどういうものなのか、わたしにはよくわからない。気味の悪い姿をしていた時もあったから、

今はどうなっているか、心配だ。
それにしても、生まれ出る所は、どんな所かわからないが、いろんな音がしている。騒がしいらしい。近くで、いつも同じトーンの音がする。大きな音というか声だ。この声を覚えるように教えられている。誰に教わっているのか、自分にもわからない。
お母さんは、わたしに話しかけてはこないようだ。近くにいるのだが、わたしに話しかける習慣がないようだ。もちろん、わたしから話すことはできない。しかし、わたしは、聞くことができる。
わたしは、この声が頼りだ。もっとたくさん話しかけてほしい。時々、わたしが教えられた、わたしを食べてしまいそうな獣に近い声を出すものが、近くにいる。教えられた恐い声とは少し違うから心配はしていない。わたしは、まだお母さんのお腹にいる。
お母さんは、わたしに話しかけるより、その、獣のような生きものに話しかけていることが多い。
わたしよりかわいいのだろうか。
嫉妬ではないが、おかしなものだ。
お母さんは、毎日、出かける。一日中、ウルサイ。わたしのお母さんは、けっこうおしゃべりだと思う。最近は慣れてきている。夜に帰ってきて、獣のような生きものと話している。
どうしてわたしと話さないのか、不思議だ。
わたしを、何と思っているのだろう。わたしは、声も聞こえているあかちゃんだ。ただ、まだお母さんの子宮にいる。
最近、わたしは、お母さんの声が聞こえないと、心配になることがある。血管を流れる音が大きいのに、お母さんの声が聞こえない時だ。
血管を流れる音が小さくなって、ドックンドックンの音がゆっくりになった時は、ずっと、なにもない。それはわかってきた。お母さんは、何もしていない。何をしているのかわからない。ずっとながい時間だ。
わたしは、血管を流れる音が小さくなった時は、お母さんの声が聞こえないものだと思っているから、心配はない。しかし、大きなドックンドックンの時に、お母さんの声が聞こえないと、心配になる。
お母さんが、どうしてわたしに話しかけないのか、不思議だ。わたしは、そ

れだけで安心するのに、どうしてだろう。

〇匂う

最近、口の奥から、何か匂う。しかも、どこからか、声がするようだ。だれかが教えてくれている。生まれ出たら、すぐに喰われてしまうかもしれないから、喰われてしまいそうな獣の匂いを覚ろと教えてくれている。カミサマに違いない。わたしは、身体に、その匂いを染み込ませている。ホントに危ないのだろうか。そしたら、このままここにいた方が安全ではないか。

おかしなことに、その獣の匂いだと教わっている匂いは、学習できない。わたしはお母さんの子宮にいるそうだが、お母さんは、わたしを喰ってしまうような獣の匂いは出せない。

架空の匂いを覚えないといけないのだが、そんなことは難しいのではないかと思ってしまう。

それでも、一生懸命に教えてくれるので、ガマンして覚えようとする。生まれ出るということは、そんなに危険なことだろうか。

わたしは、この匂いを覚えるように指図されるまで、匂いなどというものがあることすら知らなかった。

最近、すごく感じるようになった。架空の、わたしを喰ってしまいそうな獣の匂いだと教わった匂いとは、ゼンゼン違う匂いがしている。

お母さんの匂いだ。

いきなり、わたしは、すごく心地よくなった。

時々、お母さんの声が聞こえなくなって心配をしていたし不安だったのだが、お母さんの匂いがしてきて、わたしのこころは落ち着いてきた。

お母さんの匂いは、お母さんの声のように、聞こえなくなる時がない。いつもいつも、お母さんの匂いは消えない。

生まれ出て、どうなっているのだろう。音は、騒がしい所に出そうだとわかるが、匂いは、お母さんの匂いしかわからない。わたしを喰ってしまいそうな獣の匂いを教えられているが、とんでもない匂いだ。もしこれが本当なら、音だけではなくて、匂いも、すごい騒がしい所に、出てしまいそうだ。

〇水を口に入れるようになった

わたしは、お母さんの匂いをいつも感じていられるようになって、安心している。不思議なことに、わたしが浮いている水に、味があることにも気がついた。

最近である。

そして、わたしは、また教わっている。また架空のことだ。すっぱい味のものは吐き出せ。苦い味のものも吐き出せである。理由を示してくれないから、よくわからない。しかし、わたしの身体は、無条件に、教わったことを覚えようとしている。多分、わたしが生き残ることに関与している。それは間違いない。

わたしを連れ去るかもしれない羽音を覚えた。わたしを襲って食べてしまうかもしれない獣の唸り声を覚えた。そして、理由がわからないが、すっぱいものは吐き出せと教わって、苦いものも吐き出せと教わった。

わたしは生き物だ。なにか食べない限り生き残れないことは承知している。今は、お母さんから、胎盤を通じて栄養をもらっていることも承知している。

自分で食糧を得ないといけなくなった時のためだ。生まれ出たら誰も教えてはくれない。自分のことは自分で守らないといけない。

それにしても、どうしてそんな危険な所に出て行くのか、わけがわからない。

わたしが浮いている水は、架空に教わっているすっぱい味とは違っている。ゼンゼン違う。架空に教わっている苦い味とも違う。この味だと安心なのだろう。これも覚えておこう。

〇口がなにかおかしい

わたしは指を口に入れて、おっぱいを飲むことを教わっている。誰に教わっているのかわからない。

今完璧に覚えろと言われている。

おっぱいさえ飲めれば生き残れるからと言われている。

わたしは、ただ従っているだけだ。

ホントに、わたしは、何がなんだかよくわからない。生まれたら喰われるかもしれないから獣の匂いを覚えろと言われて覚えた。わたしにはわからない。ホントに、わたしを喰ってしまうような獣がいるのかどうかもわからない。
わからなければ、従うしかない。
今おっぱいを飲む練習をしろと言われたら、やるしかない。お母さんのおっぱいらしいが、どういうカタチをしているかも、わからない。おっぱいがどうやって出るのかもわからない。わからないけど練習する。
わたしの舌がよく動くようになった。
急にだ。
舌がよく動くこととおっぱいを飲めることが、どう繋がっているのか、よくわからない。
わたしが、常に教えられることは、架空のことだ。ワシの羽音だってイメージだ。実際のワシの羽音で学習するわけではない。しかし、どういうわけだか、完璧に覚えてしまう。そう感じる。
おっぱいを飲むことだって、きっと、舌が関係しているに違いない。信じている。それも、微妙な舌の動きだ。こんなに舌が細かく動きはじめたことには理由があるだろう。
わたしの身体の中で、舌だけが動きが激しい。足など、動かそうと思っても動かない。おかしい。舌がすごい動きをするので、唇だって、動くようになった。口を開けたり閉じたり、自由にできるようになった。多分、おっぱいを飲むことに関係がある。
わたしの口は、急に忙しくなった。急に変わった。

〇わたしは１人で自分を育てる

どうやら、わたしは、もう少しで子宮から生まれ出るらしい。準備をしている。準備で一番大事なことは、おっぱいを完璧に飲めることだろう。その練習だろう。
多分、お母さんは、わたしが何をしているか、さっぱりわからないだろう。
わたしが、生まれて、おっぱいを探して、自分でおっぱいを飲みはじめるこ

とを、理解できないだろう。理解できないというか、当然だと受け止めるかもしれない。当然ではないのだ。わたしは、生まれる前にトレーニングをしている。

いままでもだった。

わたしが、高速変化している時も、お母さんは、少女時代を歌っていた。カラオケが好きだ。

多分、これからも、こういう関係だろう。わたしとお母さんだ。お父さんになると、まるで遠い。わたしが生きることに、まだ登場しない。大事な人らしいのだが、印象がない。印象がないというか、登場してこないのだ。

もうわたしは、覚悟しないといけない。わたしはわたし、お母さんはお母さんだ。すごく世話になっているが、お母さんは、生き物の原点をやってくれている。豹のお母さんがやっていることと同じだ。わたしを生き残らせることが、豹のお母さんも、わたしのお母さんも、望んでいる。だから、同じ動きをする。

わたしは、自分で育たないといけない。お母さんには見えない。それでいいのだ。生き物はみんなそうなっている。人間だけが違うわけでもない。わたしとわたしのお母さんだけが特殊ではない。お母さんは、わたしのことは、よくわからなくても仕方がない。

わたしのながい旅なんか、知ってくれと言っても、難しい。

わたしは、自分で育たないといけない。しっかりしないといけない。

〇お母さんが心配だ

お母さんは寝込んでいるらしい。腰が痛いらしい。肩もこっているらしい。みんな腰が痛くなったり肩がこったりするから仕方ない。誰かが言っている。ここんとこ、２日も寝込んでいる。

わたしは、もう、あまり関係ない。お母さんが寝込んでも大丈夫だ。わたしは、しっかりしている。

体重が10キロ近く増えたそうだ。

お米を10キロ持っているようなものだ。わたしだ。わたしは３キロくらいなのだが、もろもろで増える。それもあるが、太っている。

ありがたい。わたしのために、太ってくれた。
わたしを出産した後、痩せることは簡単だ。ミトコンドリアを働かせればよい。脂肪細胞を消費して、熱を出す。ミトコンドリアが働くには、身体を動かせばよい。ミトコンドリアは、酸素が足りなくなって激しく呼吸をする。ミトコンドリアが呼吸をしないと、お母さんの脂肪細胞は消費されない。
ミトコンドリアを多くすることはできない。ミトコンドリアが少なくならないように、気をつけることはできる。
ミトコンドリアは、温度変化に弱い。冬場に注意だ。夏だって、冷房に注意だ。お母さんは電車の冷房で気分がワルクなると、電話で話していた。あれは、お母さんのミトコンドリアが、冷房で、弱ったのだ。
ミトコンドリアは、気圧差にも弱いが、わたしは、まだ子宮だから、お母さんは、高原に行ったりはしない。とにかく、少しの環境の変化にも弱いのだ。もちろん、紫外線にも弱いし酸素にも弱い。
とにかく、お母さんのミトコンドリアさえ元気でいてくれたら、お母さんは、わたしのために太ったのだが、元に戻れる。
それはいいのだが、お母さんは、今は10キロも体重が重くなった。腰が痛いと横になっている。肩がこると言って、お母さんのお母さんに揉んでもらっている。
わたしは、まだ子宮にいるが、背筋をピンと伸ばせる。今は、子宮が狭くなったから、背筋をピンと伸ばしたら、壁にぶつかる。わたしは丸くなっていないといけないのだが、背筋をピンとしようと思ったらできる。
わたしは、背中の筋肉が強くできている。それは間違いない。
お母さんは、多分できない。背筋をピンと伸ばせない。
お母さんは、背筋が弱いのだ。
わたしもだが、人は、身体の前には筋肉がない。背中の筋肉で体重を支えることになる。わたしは、今は関係ない。体重などないかのようだ。
だから、腰が痛いことは、背中の筋肉が、急に増えた10キロを負担できないことだ。肩だって同じだ。背中の骨がダメだったら、わたしを子宮に収めていることなんかできない。
お母さんの背中の筋肉が、わたしを支えていられなくなったことは確かなのだが、お母さんの骨盤が、緩くなってきていることも事実だ。子宮が緩く

なったら、水が漏れて細菌やウイルスが入ってくる。だから、子宮が緩くなることはない。
しかし、骨盤は、早めに緩くしないと、間に合わない。おかしなことに、お母さんの骨盤では、わたしは通れそうもない。すごい計算されている。だれが計算するのかわからない。お母さんの骨盤が少し緩くなると、わたしがやっと通れる。
骨盤が緩くなったら、背中の筋肉の負担は更に大きくなるから、腰が痛くなる。
もう少しだから、ガンバってほしい。
中学生の時に運動しておいてくれればよかった。背筋を鍛えておいてくれればよかった。お母さんのことだ。わたしは、心配なのだ。

○わたしは固くなった
昨日から、わたしは固くなってきている。自分でもどうなっているのかわからない。
最近、ここが狭くなって動けなくなってきていることは事実だ。手もおかしい。自由に開いていたのだが、グウになった。開こうと思って開かない。わたしは、固くなって丸くなってきている。これはなんなんだ。
だれがわたしを固くして丸くしているのだろう。いつから固くして丸くするのだろう。こんなことは、お母さんはゼンゼン知らないことだ。お母さんは、わたしのことは何も知らない。このことは、多分、カミサマしか知らないし、知る必要もないことだろう。亀の卵がいつ割れるのか聞かれても答えられない。そんなことは、無限にある。カミサマが決めたのだろう。
わたしが固くなって丸くなることは、わたしですら知らなかったことだ。だから肩がこるようなことでもない。苦しいわけでもない。
わたしは、何かの準備をしている。間違いない。もうすぐ、生まれ出るのだ。
わたしは、やっとわかった。どうしてわたしが固くて丸くなっていたのかわかった。
こんなに狭いところを通るのだ。しかも、わたしが拡げないと拡がらない。

確かに、子宮は、水があるのだし、細菌とウイルスが入って来ないようにしてるし、酸素も紫外線も届かないようにしている。密室だったのだ。そこから出るのだから、すごくタイヘンなことになるのはわかる。

しかし、それにしてもタイヘンだ。

わたしは、固くならなかったら、とても、ここから出られない。しかも、丸くならなかったら、わたしは危ない。手がグーになっていないと、指が、どこかに、引っかかる。足だって丸くしておかないと、引っかかる。

やっとわかった。

だれかが、わたしを固くして丸くしている。こんな狭いところを通ることがわかっている人だ。誰だ。カミサマなのか。

しかし、タイヘンだった。

わたしは、これほどタイヘンだったのだが、お母さんは、もっとタイヘンだったらしい。わたしは痛くはないが、お母さんは、痛いらしい。考えてみたら、密室になっていたところに、穴を明けて、わたしのような、大きなものが通るのだ。お母さんの腰の筋肉だって驚く。押しやらないと、わたしは出れない。どんだけ痛いか、想像はできる。

だけど、他に、方法はないだろう。

わたしは生まれた

〇すごく寒い

こんなに寒いとは思わなかった。すごく寒い。とてつもなく寒い。わたしは、震えてしまう。寒さに震える。お母さんから離されて、いきなり、お母さんの匂いがなくなって、いきなり寒いところに置かれる。放置されているとしか思えない。ホントに身体が寒くて震える。

震えていると、またカミサマとしか思えないのだが、身体が温まってきた。肩のあたりが異常に熱い。

わたしの肩のあたりの細胞のミトコンドリアは、こんな状況を見越しているかのように、集中している。わたしのお腹の中も熱くなってきた。お腹の中も、ミトコンドリアが多い。ミトコンドリアが集中している。わたしは、はじめて知った。寒さに震えていたのに、身体が熱くなってきた。

わたしは、生まれる前に、こんなことは聞いていなかった。

生まれたら寒いけど、ガマンしていればすぐにミトコンドリアがガンバって熱くなるから、慌てるなと言ってほしかった。

わたしは、子宮と同じように、37度くらいの所に、生まれ出るものだとばかり思っていた。ものすごい外し方だ。わたしは、何も準備ができていなかった。生まれたら、喰われそうになるから準備しろというのは、教わった。

わたしは、何も準備していなかったのだが、わたしのミトコンドリアは、最初から、そのつもりだった。わたしとわたしのミトコンドリアは、同じ意思を持っていない。やはり、共生なのだ。わたしは、寒くて震えても大丈夫だとは、思えない。

わたしは温かくなって、震えが収まった。

わたしの外の温度は、多分、18度くらいだろうか。よくわからない。それでも、わたしより、20℃くらい温度の低いところに生まれ出ている。もう、子宮のような、温かくて安心できる所へは、返れそうもない。

多分、わたしが寒いのではなくて、ミトコンドリアが寒いのだろう。ミトコンドリアは、わたしと違って、生きていける温度の範囲が狭いのだろう。だ

からわたしに共生している。わたしの細胞にいる。わたしに、37度くらいの細胞温度を守らせる。

わたしの細胞は、30度くらいでも何時間も生きていられそうだが、細胞中のミトコンドリアは、ダメだろう。今は、すごいミトコンドリアが多いから、発熱の方が高くて、身体が30度などにはならない。

わたしは、多分痩せる。こんなにミトコンドリアが動いていれば、わたしの脂肪は、一気に燃焼されてしまう。心配になる。そうかといって、身体が地面に貼り付いて気持がワルイ。なにも食べたくない。

わたしは、ふっくらして生まれ出てきたのに、多分、一気に痩せる。お母さんは、多分、心配するだろう。困ったことになる。

お母さんも、これから少し体重を減らさないといけないのだろうが、わたしのようにすればいいのにと思う。

わたしは、仕方なく体重が減るのだが、お母さんは、体重を減らしたいだろう。わたしのようにという意味は、ミトコンドリアを減らさないように気をつけることだ。わたしの細胞は、今は、ミトコンドリアに溢れている。しかし、お母さんは、そうはいかないだろう。ミトコンドリアがいっぱいだったら、時々、汗かきだと言われる。あんまり、ミトコンドリアを必要としない気がする。ミトコンドリアが少ないと、脂肪を燃焼しないから、体重は減らない。

お母さんのことなど気遣うことはないか。わたしが危ない。

ミトコンドリアの多い細胞のことを褐色脂肪細胞と言うらしいが、わたしは、ラッキーだった。震えが止まった。

〇お湯の中だと思っていた

寒くて震えるのだが、そもそも、生まれ出たところがお湯でなかったことに驚いてしまった。お湯でなくても、水でもいいのだが、どうして水がないのか不思議だ。ずっと水の中で過してきたのに、いきなり水がないのだ。どうしてこういうことになっているのか、よくわからない。こんなことは教わらなかった。

もし、このまま水の中で生まれたら、そのまま水の中で、わたしは生きるの

だろうか。多分、難しそうだ。呼吸が難しいだろう。わたしは、エラを失っている。失っているとはおかしな表現だ。この前までエラがあった。数か月前までだ。今は、もうない。わたしは、肺で呼吸をするように、慣らされてきている。
肺で呼吸はしていないのだが、身体は、肺で呼吸をするように変化している。お母さんと繋がっている部分を切り離せば、わたしは、肺で呼吸をするのだろう。
そういう意味では、もうあと戻りはできないのだ。わたしは、水の中で暮らすように、身体ができていない。水の中ではない、空気中から酸素を吸収するように、身体ができている。
どうしてこうなってしまったのか、さっぱりわからない。なんでずっと水の中で暮らしてきたのか、わからない。
多分、水の中の方が、リスクが少ないのだろう。それは間違いない。そしたら、なんでリスクの大きい、大気中で暮らすことにしたのだろう。おかげで、わたしは、出産にもリスクが生じている。水で生きていて、水に産み落としてくれれば、それで済むことだ。そういう生き物だっているに違いない。
わたしは、海で10カ月を過ごして、大気の中に産み落とされるのだ。おかしなことになっている。どう考えても、ホントは水で暮らしたいと、言っているような気がする。
わたしは、一気に乾燥してしまった。あたりまえである。呼吸もタイヘンだが、わたしは干上がってしまう。
わたしは、あたりまえだが、水でできている。ただ水分は、多分85％くらいだろう。ほとんど水と言ってもいいくらいだ。それが、一転、水がない所に出てしまった。どうなるのだろう。
わたしは疲れた。思っていたことと、あまりにも異なっている。

〇わたしは呼吸をしている

わたしは、生まれてみて不思議に思うことがたくさんある。
お母さんから切り離されて、自分で呼吸をしている。わたしは、どうして呼

吸をしているのか、自分でもよくわからない。
心臓が動いているのは、どうしてかわからないが、子宮の時代から心臓が動いていたから、不思議ではない。しかし、わたしが呼吸をするのは、生まれてすぐにはじまったことだ。わたしは、呼吸をするように、教わったわけではない。勝手に、呼吸がはじまった。
子宮の時代には、お母さんから胎盤を通じて、酸素をもらっていたのだろう。わたしが必要としているわけではなくて、わたしと共生しているミトコンドリアが必要としている。わたしは、どういうわけだか、お母さんと離れたので、わたしは、自分で、ミトコンドリアのために、酸素を得ないといけない。これは、わたしに課せられた作業だ。
わたしに課せられた作業なのだが、わたしは、何も知らない。勝手に、わたしの身体の一部が、動いている。
心臓のように、ポンプのスイッチがあるわけではないようだ。スイッチがないのに、どうなっているのだろう。
多分、わたしが、まだうまく身体を変えてないのだろう。進化と言うらしいが、筋肉の自動的な動きで呼吸するのは、まずいだろう。おかしな寝方をしたら、呼吸が止まるかもしれない。ヤバイと思う。
ヤバイと思うのだが、わたしは、空気を吸って吐いている。おかしな行為だ。お母さんから胎盤を通じてもらっている方が確実だった。
空気がワルクなれば、わたしはダメになる。
なんか、おかしい。
ダメな空気だったら、一時的に、呼吸を中止するのだろうか。わたしのミトコンドリアは、酸素を溜めこむことができるのだろうか。
多分、難しい。今は、わたしの細胞は15兆個くらいだろうが、お母さんのようになったら、60兆個にもなる。そこに、最低でも10個か10匹のミトコンドリアがいるのだ。天文学的数字だ。わたしの身体には、酸素を溜める所などない。ミトコンドリアも、そんなものは、持てないだろう。
なんとも、不安定なところに来てしまった。
多分、わたしが、数分、呼吸をするのを止めるか、おかしな空気になって酸素がなかったりしたら、わたしのミトコンドリアは、全滅するのだ。
わたしのミトコンドリアが死んでしまうと、わたしは、酸素にまみれて死ん

でしまう。それより前に、わたしの体温は、一気に環境温度に近くなる。
今は、生まれて、呼吸をしている。多分、空気は、完璧なのだろう。完璧だから、酸素を溜めこむ機能がない。
いいか。

〇お母さんと離れてしまった

わたしは、お母さんと離れてしまった。わたしは、お母さんと離れてしまうことは知っていた。わたしは１人で生きていかないといけない。わたしは、そのつもりで自分で育ってきた。
しかし、お母さんは何も知らなかったかもしれないが、酸素ももらい栄養ももらっていた。繋がっていたのだ。これは凄いことだ。
わたしは、離れることは知っていたから、寂しいことはないが、いままでよりも、もっと、一人で生きないといけないと思ってしまう。
繋がっていないから仕方がないのだが、お母さんを感じない時があることが、不安だ。わたしがお母さんを感じるのは、主として匂いだ。
わたしは、まだ生まれたばかりだ。これからどうなるのか、なにもわからない。ただ寒いことに驚いているし、生まれた先が水の中ではないことに驚いている。
多分、わたしは、なにもできそうもない。なんだかおかしい。なにもできそうもないのに、ここでお母さんと切り離されるのは、辛くなる感じがする。
今だって、お母さんがいない。わたしは、どこか違うところにいる感じがする。近くにお母さんはいない。こんなことは、はじめてだ。
多分、わたしは、なにもできない。だから、お母さんが感じられる場所にいてほしい。なにかあったら、呼べば、すぐ来てくれる所だ。今は、遠くにいる。多分遠くだ。わたしが呼んでも、わたしの声が聞こえそうにない。
こういうことが、すごくイヤだし困るし不安だ。
このいきなりお母さんを感じなくなるのは、なんだろう。幸いなことに、教えられていた、獣の匂いのようなものはない。多分、お母さんがいなくても安全な場所にいるのだろうが、それにしても、心配だ、わたしは、固くなっている。何があるかわからないからだ。どうして、生まれてすぐに、こんな

にお母さんと遠く離れてしまうのか、不思議だ。わたしは、落ち着かない。緊張している。誰かが足に触った。わたしは、緊張しているし、ビクっとなる。
わたしは、教わってきたのだ。出産後が危ない。ワシだって匂いを嗅いで飛んでくると教わった。
わたしは、狙われている。
これはタイヘンだ。こんな時に、お母さんと離れてしまったのだ。

○誰かれとなく触ってくる

お母さんと離れてしまったせいかもしれないが、誰かれとなく、わたしを触ってくる。子宮の時には、わたしは、壁にぶつかっているのは知っていたが、こんなことはなかった。
わたしは、誰かが、少し足に触っても、わかる。フトンがパタンと顔にかかってきてもわかる。
わたしは、わたしを襲ってくる獣がわたしを触った時のことを教わっていた。もちろん、架空のことだ。
しかし、なにかおかしい。わたしを食べる獣の匂いはしないのだが、わたしの顔や頭を、何度も何度も触ってくる人がいる。手の感触からして、人だ。お母さんと同じだ。ただ、匂いがお母さんではない。
わたしは、教わっていた。触られたら注意しろだ。
わたしは、何度も何度も触られる度に、ビクっとする。わたしは、無意識に、自分を守っている。
すごい困ったことになったと思っている。
触られたら喰われると教わったのだ。お母さんだけは、わたしを喰わない。お母さんを間違うわけがない。
頻繁に触られるのだが、わたしを喰いそうな匂いの獣ではない。
わたしは、どうなっているのか、さっぱりわからない。
お母さんが、わたしの背中をずっと触っていた。わたしの背中のスイッチが、バシバシ入っていくのではないかと思った。
わたしは、子宮の時には感じていなかったのだが、あの狭い通路を通る時

に、わたしの、背中やお尻や足などの、触られて感じるものが、目覚めたのだと思う。そして、今日、お母さんに背中をさすってもらって、更に、敏感になったように思う。
わたしは、もう、羽根が少し触ったとしても、理解できる。
それはいいのだが、どうして誰かれとなく、わたしに触りたがるのだろう。
わたしは、生まれたばかりだ。それどころではない。

〇地面に貼りつけられて

予想していなかった。子宮の中では動き回っていたのに、自由だったのに、生まれた瞬間から、地面に貼り付けられている。すごいチカラで地面に引っ張られている。声も出ない。
わたしの心臓は、一気に忙しくなった。この地面に貼り付けられるチカラに対抗するかのように、心臓が動いている。ドックンの音も大きいし速くなった。
よく眠っていて気持ちよさそう。
お母さんのお母さんらしい人が言っているが、わたしは、気持がいいわけではない。気持がワルイ。この地面に貼り付けられるチカラがイヤだ。気分がワルイ。おっぱいだって飲む気もしない。ただジッとするだけだ。すごい心配だ。この先どうなるのだろう。時々眉間にシワが出るのを自分でもわかる。あかちゃんなのにおかしいとは思うのだが、どうにもならない。気持がワルイ。手だって、上に上げられなかった。
どうしてこんなすごいところで生きないといけないのか、理解ができない。
わたしが不思議なのは、背中がベターと押しつけられることだ。地面に押しつけられる。お腹が上にあると心配なので、お腹を下にしたいのだが、簡単には、自分を回せない。おかしなことになってしまった。子宮の中では、水の中では、上も下もなかった。時々壁にぶつかってしまうくらいだ。
なのに、どうして方向があるのかわからない。どうあがいても、お腹が上に行くことはない。わたしのチカラでは、身体を動かせない。
このまま、わたしは、身体を動かせないのだろうか。もっと自由に動いていたのに、何だろう。

時々、お母さんが起こして抱いてくれる。抱いてくれるのではなくて、おっぱいを飲まそうとしてるのかもしれない。わたしはまだ、それどころではない。わたしは、生まれたばかりだ。気持がワルイ。

〇わたしの主体は腸管なのに

身体の向きのことでは、もっとおかしなことがある。今は、お母さんがいないのだが、わたしは、お腹を上にして寝かされているらしい。

お腹を下にしたいのだ。

わたしは、ながい旅をしてきたからわかっている。

わたしは、最初は、腸管しかなかった。口と腸管と肛門しかなかった。だから、わたしは、なにかを食べないと、生きていけないのだと理解した。わたしは、腸管なのだ。食べることが主なのだ。

わたしは、わたしの主体の腸管を守りたい。ワシが飛んできたら、多分、わたしの腸管をつっつく。狼が来たら、わたしの腸管から食べる。

そう教わった。

わたしは、腸管を下にして守りたい。

しかし、どういうわけだか、お母さんもだが。わたしの腸管を上にする。わたしは、どうぞ食べてくださいスタイルになってしまう。そうかといって、わたしは、自分で腸管を下にすることができない。

これが、生まれてきての不安の一つだ。いっぱい不安があって、身体が緊張している。お母さんではない誰かがしょっちゅう来て触る。獣の匂いはしないのだが、ビクッとする。わたしは、ビクついている。怖いのだ。わたしは、喰われることが怖いのだ。

わたしは、頭が大きいことに気がついた。生まれる時に驚いた。頭がなかなか通れなかった。わたしの主体は腸管なのに、なんで頭が大きいのだろう。どうしてこんなにアタマが大きくなったのだろう。

わたしは、ながい旅をしたから知っている。わたしは、最初は、頭などなかった。前に進みやすく変わったために、前に、ぶつかってもいいように、頭ができた。前に進むと、食べ物を捕獲しやすい。わたしは、とにかく、食べないと生きられない。そうこうしているうちに、わたしの身体の動きをつ

かさどっている脊髄が伸びてきて、頭脳ができた。今は、頭脳が、わたしの頭のような印象だ。頭脳がデカクなったのは、わたしの筋肉が複雑になったからだ。わたしが陸に上がって、複雑な動きをするようになって、頭脳は、更に大きくなった。
しかし、わたしは、頭脳ではない。腸管なのだ。お母さんや、お母さんのお母さんや、時々来る低い声の人や、匂いはお母さんに似ているが、お母さんではない人達は、わたしの腸管に話しかけることはない。わたしの頭脳に話しかけている。
よくわからないことがある。頭脳は、わたしの腸管を守る保安官のようなものなのに、ただそれだけの役目なのに、いかにも、わたしであるかのように、わたし以外の人は接する。お母さんも、そうだ。
おかしいと思う。

〇免疫寛容ではないわたし

わたしは、生まれ出て、わけのわからない膨大な数の細菌に驚いている。ウイルスだってすごい。とんでもないところで生きていかないといけない。
子宮の時代には、安全な時代だった。
どうしてこんな不潔なところで暮らすのか、わたしにはわからない。
もしわたしが免疫寛容のままだったら、わたしは、３日と生きていられないと思う。わたしは、細菌にまみれる。
生まれてみて、よくわかった。わたしが、どうして免疫寛容だったかだ。どうして、免疫など必要ないのに、機能を維持したかだ。ただ、寛容状態にしていただけなのだ。機能はあるけど働かない。
この細菌やウイルスをどうするのか。
多分、うまく付き合ってくれなのだろう。ワルサをしたら免疫でやっつけろだろう。
わたしは、生まれた瞬間に、免疫寛容ではなくなる。それは確実だ。こんなに不潔なところだ。生まれて数時間も免疫寛容だったら、わたしは、生き残れないかもしれない。
驚いたことが、他にもある。

多分、酸素にわたしは殺られる。ミトコンドリアが酸素を必要としているからいいようなものだが、わたしは酸素とは相性がよくない。わたしの細胞は、何かある度に、酸素に殺られる。子宮の時代は良かった。酸素などなかった。
紫外線がわたしを貫くことを知った。
こんなところで生きていけるのか、心配である。どうして太陽の光が当たるところで暮らさないといけないのか、わけがわからない。
地面に貼り付けられることは、もっと厳しい。こんなすごいチカラだったら、わたしの細胞は、ボロボロにされる。多分、60日ももたないのではないかと思う。もしわたしが免疫寛容だったら、60日も経たないうちに、わたしは、粉々にされる。地球に粉々にされるのだ。地球はわたしを生んでくれたのだが、わたしを地球に戻そうとしている。
こんなすごいところでわたしは生きないといけないのだろうか。生まれるまで知らなかった。
あまりにも、子宮は、わたしにとって、安全な場所だったのだ。
わたしは、依然として、子宮の時代から、細胞分裂を繰り返している。どこまで繰り返すのか、今はわからない。多分、細胞の数が、60兆個に達するまで繰り返すのだろう。
わたしは、免疫寛容ではない。生まれたばかりだが、免疫が働いている。免疫は機能が複雑だ。しかし、しっかり準備している。生まれる時に、ミスがあっても、免疫が働いて、元に戻せるようになっている。
したがって、今のわたしは、細胞分裂もするし、免疫が働いて、ダメ細胞を壊すこともやっている。壊したダメ細胞は、遺伝子がほっておかない。新しい同じ細胞をつくる。
わたしは、いつから免疫寛容ではなくなったのか、自分ではわからない。わたしのすべての細胞に、スイッチが入ったように、生まれた瞬間から、わたしの免疫は、ダメ細胞と戦っているし侵入した細菌やウイルスと戦っている。よくわからない。

〇お母さんの匂いだけが頼り

わたしは、わたしを喰ってしまいそうな獣の匂いを覚えさせられた。忘れないように、身体に染み込んでいる。しかし、おかしい。獣の匂いなどない。そんなに簡単には出会わないのかもしれない。わたしを喰ってしまう獣だ。いろんな獣がいて、細かく覚えさせられた。
生まれた時が１番守りにくいのだと教わった。お母さんが、タイヘンなのだ。卵を産み落とすわけではない。わたしを産まないといけない。ワシに襲われたって、わからないかもしれない。わたしが連れ去られることだってあるだろう。匂いで察知するように教わった。
もっと不安なことがある。お母さんの匂いが消えることがある。すごく不安だ。
お母さんの匂いをわたしは間違えない。時々、同じような匂いの人がやってくるが、わたしのお母さんではない。わたしは、生まれてまだ２日目だが、わたしのおかあさんを間違えることはない。ずっと匂ってきた匂いだ。唯一安心できる匂いだ。
どうしてお母さんの匂いが消えるのかわからない。何をしているのだろう。お母さんはわたしのためだけにいると思っているのに、どうしてお母さんの匂いが消えるのかわからない。
お母さんは、わたしの匂いがわからないのだろうか。わかっていそうもない。
時々、獣ではないが、獣に近い匂いのする生き物が、近くに来る。お母さんとよく話しているから、獣ではないのだろう。わたしの匂いが遠くからでもわかる。わたしも、その獣ではない獣に近い生き物の匂いが、遠くからでもわかる。
お互いに、同じくらい匂うのだろう。それに較べて、お母さんが、わたしを匂うことはなさそうだ。どうなっているのだ。
そもそも、お母さんが、どうして、こんな獣ではない獣に近い生きもをソバに置いているのかわからない。いつもはいないが、低い声の人に連れられて来る。来ると、わたしの近くにやってくる。
お母さんが、時々、わたしの匂いをそそるものを食べている。多分、木の実だと思う。わたしは、わたしを喰ってしまう獣の匂いと、わたしが食べてもかまわない、安心できる木の実の匂いを教えられている。だれに教えられた

のかわからない。わたしは、お母さんの匂いが一番安心できるのだが、時々お母さんが食べている木の実の匂いにも、安心感を感じる。安心感というのは、襲われそうもない時間のことだ。
それにしても、わたしが教えられた匂いとは、ずいんぶん違っている。これはなんだろう。
わたしが教えられた匂いは、お母さんと、私を食べる獣と、木の実だ。何の匂いが危険でどんな匂いが安心なのかを教わった。
とんでもないと思う。
わたしが一番驚いたのは、わたしをキレイにしてくれたのだろうが、お湯を使ってくれたことだ。何に驚いたかというと、水の匂いだ。こんな匂いは教わらなかった。
匂いではよくわからなかったので、味で感じてみた。
これは毒だ。この水は毒だ。
しかし、お母さんは、この水を飲んでいる。わたしがおかしいのだろうか。
今日も、お湯で洗ってもらったが、わたしが泣くことが、おかあさんにわかってもらえなかった。わたしは、イヤだから泣いているわけではない。水の匂いがイヤなのだ。
もっと、すごい匂いがある。教わってない匂いだ。
お母さんがいない時の匂いが、とにかくどうにもならない。オレンジの実かなんかの下に置いてくれるのだったらグッドなのだが、なにやらよくわからない。わたしを洗ってくれる水に近い匂いがするところに、わたしを置いて行く。お母さんは、何をしているのだろう。すごい不安だ。ガラスの向こうから、かわいい～、よく眠ってる～とか、誰かが言っているのだが、そうではない。わたしは、お母さんの匂いがないから心配なのだ。

〇味も感じられる

わたしは、匂うチカラが、お母さんより圧倒的に凄いのだが、匂いを嗅ぐだけではなくて、味もわかる。まだ生まれて２日目だから、おっぱいも飲まないが、わたしは、多分、おっぱいの味がわかる。子宮の中の水の味もわかっていた。少し、しょっぱい。

わたしは、生まれる前から、教わっていた。誰に教わったのかは話せない。すっぱい味には気をつけるように、教わった。わたしは、すっぱい味のものは、口に入っても、吐き出すだろう。まだ２日目だからわからないが。どうして、すっぱいものは吐き出せと教わったのか、そこまではわからない。
苦いものを、ヤバイから吐き出せと教わった。何がヤバいのか、よくわからない。
甘い味のものは、積極的に飲むように教わった。
わたしは、多分、甘い味が好きだ。
塩けは、ずっと、子宮の時代からしょっぱさを感じていたから、不思議ではない。スキとかキライとかいう味ではない。フツウのことだ。
旨いというのがお母さんにはあるらしい。
そんなものはよくわからない。
もうすぐお母さんのおっぱいを飲むことになるのだが、多分、旨いのだろう。お母さんが言う旨いとは違うと思う。わたしが、ゼッタイに好きだと思う味になっているはずだ。おっぱいの味が、どんなあかちゃんにも好まれるようになっているのは、あたりまえのことだ。
多分、この味が、人の味の基本なのだろうと、思う。
まだおっぱいを飲んでもないのに、予想している。多分すごい薄味だ。
お母さんは、わたしが、味がわかることを知らないだろう。お母さんは、なにもわからないから、わたしにあまり話しかけない。おっぱいを飲んでても、多分、黙っているだろう。
おいしかった？。
こう言ってくれるとすごくうれしいのに、多分、何も言わない。
お腹いっぱい？。
こうも聞いてほしいのだが、多分、何も言わない。
お母さんは、わたしのことは、何もわからないのだ。わたしだって、話しができないから、伝えられない。
おいしかった〰と言えばいいのだろうが、ことばがわからない。
やっぱり、お母さんには、もっとわたしを知ってほしいと思う。
わたしが味がわかると知れば、おいしかった？くらいは、言ってくれるかもしれない。

わたしは、やはり、お母さんを頼るしか、自分を守れない。お母さんと、もっとコミュニケーションしたいのだが、わたしは、何も伝える術がない。残念だ。お願いするしかない。お母さんにお願いするしかない。わたしのことを、もっと知って欲しい。
わたしは、味が、お母さんと同じくらいわかる。だから、おいしかった？と言われればうれしい。

〇おっぱいが出ないかもしれない

生まれて２日目なのだが、お母さんがわたしにおっぱいを飲ませている。生まれたばかりの昨日だってやっていた。わたしは、それどころではない。身体がベターっと押しピンで押されているのが、気持ちワルイ。おっぱいどころではない。わたしの興味なさそうな仕草を見て、困惑していたように思う。興味なさそうな仕草とは、おっぱいをくわえるのだが、おっぱいを飲んでいそうもないことだ。
遠くで、誰かが、３日くらいあんたのおっぱいも出ないことがあるからと言っている。なのに、お母さんは、心配そうにしている。今日も、わたしにおっぱいを飲ませている。いじわるをしているわけではない。わたしは、まだ、それどころではないのだ。身体の中も、何か、変化しているようで、気持がワルイ。
お母さんは、自分のおっぱいが出ないかもしれないと、勘違いするかもしれない。そこまで心配していると、余計おっぱいが出ないのではないかと思ってしまう。
おっぱいが出ないかもしれないから調乳ミルクの用意もしておくと、声の低い人が言っている。どうして、こんなことに必死になるのかわからない。わたしは、まだおっぱいを飲むような身体ではないのだ。一見、落ち着いて静かにしているようだが、わたしは、すごく気持ちがワルイし、ビクついている。心配だ。お腹なんか空かない。
お母さんと声の低い人は、わたしのおっぱいの話ししかしていない。
確かに、わたしの主体は腸管だから、なにかを食べないと生きていられない。それはそうだ。

しかし、お母さんのおっぱいが出ないかもしれないことなどは、心配症に過ぎないだろう。
声の低い人は、心配だから、調乳ミルクを買っておくと言っていたが、なんのことかわからない。多分、わたしの食べ物だ。用意してくれるのだったらありがたい。

〇体重が７％少なくなった

生まれて３日目になった。今日は、調子がよい。押しピンにも慣れてきた。一時は、どうなるかと思った。頭も、少し動かせるようになった。少し、自由になってきた。
体重が７％も少なくなったんだけどと、お母さんは、声の低い人に、相談しているのではなくて、嘆いている。いかにもわたしが、ワルイ子のような言い方だ。
わたしのおっぱいを絞ると出るんだけどとも言っている。昨日から、おっぱいの話ししかしていない。
わたしは、生まれた日と昨日と２日間、なにも食べていない。体重だって７％くらい減るかもしれない。
お母さんは体重計でわたしの体重を毎日測っている。声の低い人は、少し高いけど体重計を買っておくからと言っていた。どういう意味なのかわからない。体重計があるからいいではないか。
毎日30ｇ増えてるのが平均です。誰かが言っていた。お母さんは、それを聞いて心配になったらしい。
７％も体重が減ってるんですけど。
10％体重が減ったら、まずいと考えないといけないらしい。まずいと考えたって、何をするのだろう。声の低い人が言っていたように、調乳ミルクをわたしに飲ませるのだろうか。なにかよくわからない。
確かに、わたしは、何も飲まないし食べてないから、７％くらい体重が減るかもしれない。
わたしは、免疫寛容ではなくなっているから、ダメ細胞を消去したりする。それでも毎日30ｇも体重が増えるのだろうか。細胞分裂か。多分、しばら

く、おっぱいだけしか飲まないだろうに、おかしなものだ。
わたしは、毎日30ｇ体重が増えるのだが、ずっと、30ｇ増えるのだろうか。30ｇが、どのくらいか、わたしにはわからない。わたしは、デカクなり過ぎるのではないだろうか。わたしは、お母さんの心配症が移ってしまう。今日はおっぱいを飲んで欲しいんだけどと言っている。カミサマにお願いしてようだ。
わたしは、今日は平気だ。
飲んだ〜お母さんは、大きな声を上げた。

○どうしておっぱいが飲めるのだろう

おまえのおっぱいが出ないんじゃないか？。
わたしは、声の低い人は、感性がないとイヤになる。お母さんは、必死なのだ。心配している。それなのに、本を読んだかもしれないが、客観的な他人事のようなことしか言わない。
この人は、なんなんだ。
はじめておっぱいを飲んだ。お母さんのおっぱいだ。お母さんは、うれしそうだ。飛び上がらんばかりに喜んでいる。こんなに喜んでくれるのだったら、もっと早く飲んであげればよかった。それどころではなかったのだが。予想した通り、旨い。お母さんのおっぱいは旨い。これはヤバイ。クセになってしまう。四六時中おっぱいを飲んでいたくなる味だ。味はクセになる味だが、どういうわけだか、わたしのアタマが、止めろと言う。お腹が満杯らしい。残念だ。これも不思議なのだが、おっぱいを飲むと眠くなる。さっき、はじめておっぱいを飲んだ時などは、途中で眠ってしまった。残念だ。どうなっているのか。
わたしは、子宮の時代に、おっぱいの飲み方だけは教わった。自分の手をお母さんの乳首にして、練習もした。他のことは、何も知らない。何も練習しなかった。
だから、わたしは、いきなり、お母さんのおっぱいを飲める。
お母さんのおっぱいも不思議だ。わたしが、おっぱいを飲む時だけ出る。わたしがおっぱいを飲まない時は出ない。

こんな自動装置など、つくろうと思ってもできない。
わたしは、試してみた。お母さんのおっぱいをガッチリくわえないと、うまくいかない。ゴロゴロしてもダメだ。幸いなことに、わたしの上顎に、お母さんの乳首をはめ込む窪みができている。ここにお母さんの乳首をはめると、都合が良い。ゴロゴロしない。
とにかく、わたしの口の中で、ピッタリ乳首がはまらないと、うまく、おっぱいが飲めない。多分、空気だ。
空気が漏れないようにしないとうまく飲めない。
わたしは、すごく不思議なのだが、わたしの舌は、ビラビラ上下に動く。わたしの腸などと同じようになっている。
多分、わたしの舌は、まだおっぱいを飲む専用なのだろう。確かに、ことばもしゃべれない。おっぱいの専用装置なのだろう。お母さんのおっぱいは、わたしの舌が蠕動運動すると、シューシューっと出ている。お母さんには、見えない。わたしだって、よくわからない。とにかく、わたしの舌が動いておっぱいが出ていることは間違いない。
空気が入ったらうまくいかないという意味は、わたしは、逆さになってもおっぱいを飲めるのだろう。大昔、樹の上で暮らしていたからだろうか。

〇お母さんのおっぱいは免疫寛容だから

おっぱいを飲んだ夕方だった。体重が増えたとお母さんが喜んでいた。わたしはあたりまえだと思うのだが、お母さんはうれしそうだ。よほど心配だったのだろう。
わたしは、免疫寛容ではなくなっている。わたしの身体の壊れた細胞や、ウイルスが侵入した細胞を、わたしは、壊せる。消去できる。
しかし、わたしの胃や腸は、抗体ができていない。おかしな細菌やウイルスを、身体に入れないようにしないといけない。鼻水の抗体だって、まだよく準備ができていないかもしれない。
すごいうまくできている。わたしは、おかあさんのおっぱいを飲んだ時、感じた。お母さんのおっぱいは、抗体を、おかあさんのおっぱいと一緒にくれる。お母さんはわからないだろうが、お母さんの身体はよくわかっている。

わたしの胃や腸に、まだ、細菌を防ぐ抗体が張りついていないことを承知している。
もしかして、お母さんは、何も知らないかもしれない。お母さんの身体が知っているのだ。そして、わたしの身体と。
わたしの身体が、わたしの胃や腸に、自分で免疫物質を張り付けるようになったら、お母さんからもらうおっぱいに、抗体は含まれないのかもしれない。
お母さんの身体とわたしの身体のコラボだ。
わたしの胃や腸は、まだ、細菌を防げない。おかしなものが入ってきてもやっつけられない。お母さんの身体は、仕方なく、おっぱいに、自分が胃や腸で使っている抗体を含ませて、送り込んでくるのだ。すごいことだ。
わたしの胃や腸は、こんな状態だから、お母さんのおっぱいは、免疫寛容でないと困る。わたしがおっぱいを飲んだら、そのままわたしの身体に吸収してくれないと困る。消化だのメンドーなことは困る。
わたしのお母さんに伝えておかないといけないことがある。同じおっぱいだからと、牛のおっぱいを飲ませるかもしれない。わたしにだ。
わたしは、牛のおっぱいは飲めない。牛のおっぱいは免疫寛容ではないから、身体に吸収できない。消化して、アミノ酸などに分解しないとダメだ。それができない。だから、調乳ミルクがある。
牛のおっぱいをわたしに飲ませたら、多分、わたしは、牛乳アレルギーになる。わたしの免疫が、牛乳を拒否してしまう。わたしの胃や腸が、免疫も含めて、完全になるまで、牛乳は、飲ませないでほしい。
お母さんのおっぱいは、わたしにとっては、これしかない食べ物だ。

〇おっぱいのホントの役割

わたしは、おっぱいを飲まないと生きていけない。確かにそうだ。おっぱいは、わたしにとって、生命線だ。
しかし、おっぱいのホントの役割は、わたし以外には、誰も知らない。
わたしは、目が見えない。まだ見えない。わたしは、動けない。動けないから手でも触れない。しかし、わたしは、お母さんが近くにいることがわか

る。お母さんが、近くにいないことがわかる。もちろん、声でもわかる。お母さんの声は、間違わない。
それよりも、ゼッタイ確かな判別方法は、お母さんの匂いだ。特に、おっぱいの匂いだ。
今日で生まれて３日目だが、はじめておっぱいを飲んだ。わたしは、目が見えないが、お母さんのおっぱいは、わかる。
知らないおっぱいの大きい人も来ることがある。
しかし、わたしは、その人のおっぱいを飲もうとは思わない。なぜなら、お母さんではないからだ。
お腹が空いて死にそうだったら、多分、背に腹は代えられないから、お母さんのおっぱいではなくても、飲むかもしれない。声の低い人が言っていた、調乳ミルクだって飲むかもしれない。
今日のわたしは、そういう気にはなれない。わたしは、お母さんのおっぱいを、すぐに探せる。飲みたくなったら、そっちに身体を向かわせる。わたしにはわかる。どこにお母さんのおっぱいがあるかわかるのだ。
もちろん、わたしは目が見えない。お母さんがどこにいるかよりも、お母さんのおっぱいがどこにあるか、わかる。
お母さんのおっぱいは、わたしに、お母さんの居場所を知らせている。ホントは、わたしは、お母さんの声でわかるのだが、お母さんの身体は、曖昧な声よりも、おっぱいの匂いで、自分の居場所を知らせている。お母さんでしかない匂いがするのだ。
多分、わたしにしかわからない。わたしとお母さんの身体にしかわからない。

〇豆腐は柔らかいから

わたしは生まれて４日目だ。わたしは、押しピンにも慣れた。気分もワルクなくなってきた。おっぱいは、おいしい。たくさん飲んでいる。お母さんは、わたしの体重を測っては、メモしている。
お母さんの晩ごはんに、わたしも連れられて行った。わたしは、カゴの中で、隣に横になって置かれているだけだ。声の低い人も一緒にいる。

豆腐だったら食べられそう。声の低い人が言った。バッカじゃないかと思ったのだが、お母さんは、無視するでもなく、うなづくでもなく、そのままだった。

こんなことではゼッタイにわたしはアレルギーになる。

まだ生まれて４日目にこんなことを言われている。

わたしの胃や腸が、まだ消化機能が完全ではないことを伝えないといけない。わたしは、なにもできない。豆腐だって、口に入れられたら拒否できない。吐き出せばいいか。

わたしは、自分で育たないといけない。わたしのことは、わたしにしかわからない。これは、タイヘンなことだ。

わたしは、タンパクをアミノ酸に分解できなのだ。

リンゴにだってタンパクがあるから、ジュースにすればおいしそうと言って、飲ませられるかもしれない。

わたしは心配だ。

豆腐だったら食べられそうと言った声の低い人が、すごく心配だ。誰だかわからないが、わたしのそばにいつもいる気がする。

○お母さんの乳首が黒くなる

わたしは、まだ目が見えない、ボンヤリとは見えるのだが、まあ〜見えない。

しかし、不思議なことに、おっぱいは見える。

わたしは、お母さんのおっぱいの匂いの方向に身体を動かすのだが、お母さんも、よくわかっていて、わたしを、おっぱいの方に向かわせる。

わたしは、目が見えないのに、上手に、乳首を口にくわえる。なぜかというと、お母さんの乳首が黒いからだ。

近づいて、黒い部分を口に含めばよいことを、わたしは知っている。

多分。お母さんは、自分の乳首が黒くなるのを知っている。わたしを産むと、乳首が黒くなるのだ。

お母さんは、自分の乳首が黒くなるのはわかっているが、どうして黒くなるのか、わからないだろう。わたしにしかわからない。

わたしは、お母さんの乳首が黒くなかったら、お母さんのおっぱいを口に含むことができない。あるいは、匂いでわかったとしても、口に含むまでに時間がかかる。
わたしは、お母さんのおっぱいだけは飲めないと困る。わたしは生きられない。
しかし、わたしは、目がまだ見えない。多分、わたしは、目を見えるようにするよりも、先にやらないといけないことがあるのだろう。あるいは、いま、目が見えない方が、生き残りやすいことがあるのだろう。
想像だが、目が見えて、自分で判断するよりも、目が見えないから、お母さんに、何でも判断してもらった方が、安全なのだろう。わたしは、まだ生まれたばかりで、ソフトがない。
ただ、おっぱいだけは、自分で探して飲めないと困る。だから、お母さんの乳首は、黒くなる。わたしが、目が見えないけど探せるようにだ。
わたしは、はっきり言って、黒の濃いものでないと、判別できない。お母さんの目もわかりやすい。

〇お母さんとわたしの身体のコラボ

お母さんの乳首とわたしの上顎の窪みも、同じようなものだ。お母さんの乳首とわたしの上顎の窪みは、ピッタリ一致するのだが、こんなことは、お母さんは、わからない。お母さんの身体とわたしの身体が無条件でコラボレーションしているのだ。理由などない。そうすることが、生き残れるからだ。
わたしが子宮から出てくる時に、丸く固くなることも、同じようなことだ。
わたしが固くならなかったら、お母さんの身体は、出産の時間を意識することはできないだろう。わたしが固くならなかったら、わたしは子宮から出られない。お母さんが、骨盤を緩めなかったらわたしは、骨盤で止まってしまう。わたしの胃や腸の免疫が不完全だから、お母さんはおっぱいに抗体を含ませて送ってくる。
すごいことなのだ。わたしやお母さんが理解してないのにコラボレーションしている。理解なんかどうでもいいか。
わたしが、おっぱいを飲んでいる間は、お母さんとわたしのコラボレーショ

ンは続くだろう。
多分、わたしは、ずっと、お母さんのおっぱいだけで生きられるようになっているだろう。お母さんのおっぱいは、わたしの成長に合わせて、成分を変化させるだろう。お母さんとわたしの本質を理解すると、おっぱいの成分が変化することを予測できる。
わたしとお母さんは、離れているのだが、くっついているかのようになっている。すべて、わたしが、生き残りやすいようになっている。一時的に、お母さんの身体が、変化している。すごいことだ。
お母さんとわたしは、切っても切れない。声の低い人はどうなっているのだろう。わたしが生きていることに、なにも登場しない。
わたしは、まだ生まれて４日目だ。

〇鼻でしか息ができない

生まれて４日目で、やっと、わたしは、少しは安心した。お腹が空いていたことは間違いない。お母さんも、安心したのだろう。寝息が聞こえる。
声の低い人が来て、わたしに掛けフトンを顔までかける。掛けフトンがわたしの鼻を覆う。
バッカじゃないかと思う。
わたしは、鼻でしか息ができない。
この人は、ずっとわたしの近くにいるのだろうが、ピントがズレている。匂いもすごい。これから先、うまくやっていけるのか、自信がない。
わたしは、おっぱいを飲む以外に何もできないことが困る。
わたしは、鼻にかかった掛けフトンを剥ぐのにも苦労をするのだ。とにかく、押しピンで押されているのだ。少し首を上に上げて、なんとか、鼻にかかった掛けフトンを防いだ。
鼻の掃除してしてあげる。
お母さんは、こう言ってくれそうだ。しかし、この声の低い人は、口で息するからいいんじゃないか？と言いそうだ。
時々、声の低い人が連れてくる、獣ではないが獣に近い生き物だって、鼻でしか息ができない。息使いを聞いていると、鼻でしか息をしていない。

時々、おかしな甘ったるい声を出すが、鼻からしか音が出ていない。
あたりまえだろう。口は食べるためにある。鼻は、息をして、匂いを嗅ぐためにある。
この声の低い人が言っていることはなんだ。
口で息するからいいんじゃないか？。
この声の低い人は、口で息するのだろうか。
全く理解できない。
わたしは、お腹を上にすることはしたくない。わたしはお腹がわたしである。１番大事だ。わたしが襲われても、１番最初に、お腹を食べられる。だから、わたしは、お腹を下にして横になっていたい。獣ではないが獣に近い、声の低い人が連れてくる生き物も、姿は見えないが、お腹を下にして横になっている。あたりまえだ。生き物は、どんな生き物でも、お腹を出しては眠らない。
しかし、お母さんもだが、声の低い人は、わたしを、すぐに上向きにする。わたしは抵抗したいのだが、押しピンで押されている身である。どうにもならない。
お腹を下にしていると、わたしの口が塞がって、息ができないことがあると言っている。どうして自分で勝手に判断するのか、わたしにはわからない。子宮の時代から、わたしは、ずっと、自分で生きてきた。自分で育っている。お腹を下にしてわたしが鼻が塞がれないようにすることくらい、あたりまえのようにできる。
こんなフカフカの布団だからできないかもしれない。鼻が塞がってしまうかもしれない。これはなんだろう。わたしにはよくわからない。
わたしが、１番まずいと思うのは、わたしが、鼻でしか息ができないことを、誰も知らないことだ。お母さんだって知らない。声の低い人なんかは、知っているわけがない。もし、わたしが、鼻でしか息ができないことを知っていれば、フカフカのふとんは、ないだろう。わたしの鼻が塞がったらタイヘンなのだ。わたしは、押しピンで押されている。身動きができない。少し動かすことができても、フカフカのフトンの、フカフカの範囲に留まってしまう。
立派なフトンなどいらない。センベイフトンに寝かせて欲しい。わたしは、

どうしてわたしの意思を伝えられないのだろう。

〇おっぱいを飲みながら呼吸ができる

わたしは、鼻でしか呼吸ができない。

この子ずっとおっぱい飲んでるんだけど苦しくないんだろうか。お母さんが言っている。声の低い人は、意味がわからないようだ。何も言わない。

わたしは、鼻でしか息ができない。

わたしは、口でしかおっぱいを飲めない。

あたりまえだが、わたしは、おっぱいを口で飲みながら鼻で息をする。

あたりまえだが、わたしは、息をしながらおっぱいを飲む。

お母さんが、どうして苦しくないのだろうかと言っていることが、よくわからない。わたしのように、お母さんはできないのだろうか。

多分そうだ。

おっぱいを飲みながら息ができなかったらどういうことになるのだろうか。

息をする時は、おっぱいを離して、おっぱいを飲む時は、息は止めるのだろうか。

そんなことはできない。

おっぱいを飲むといっても、準備に時間がかかるのだ。お母さんの乳首をくわえて、わたしの上顎の窪みにはめないとゴロゴロしておっぱいを飲めない。こんなに準備がメンドーなのに、息をする度に、おっぱいを離すことなどできない。

なにを考えているのだろう。

わたしは、ずっと、おっぱいを飲みながら息をすることができる。

〇どうして海から揚がったのだろう

わたしには、不思議なことがある。

わたしは、ずっと水の中にいた。安全だった。いつも不安になるのは、生まれたら匂いに気をつけろなどと、常に、教えられたことだ。水に中で安全な所にいるのに、どうして脅かされてばかりいないといけないのか、理解ができなかった。生まれたら喰われそうになるから気をつけろだ。

どうして、そんな危険な所に出ないといけないのか、理解できなかった。
出てみて１番驚いたのは、押しピンだ。やっと少しは頭を動かせるが、子宮の中にいた頃に較べると、全く動けないに等しい。こころなしか、わたしの顔は、子宮の時の方が、笑っていることが多い。生まれて、かわいいことはかわいいが、実のところ、不安でいっぱいなのだ。
わたしは、ながい旅の途中で、海から陸に揚がったことを知った。それがよくわからない。どうして安全な海から陸に揚がったのだろう。
わたしは、そのままガマンして、陸で生き残ったけれども、地球に引っ張られるチカラに耐えかねて、また海に戻った生き物が、いっぱいいるのだろう。みんな魚になった。骨が硬いだろう。一旦は、陸でガマンしたのだから。
わたしは、生まれてみて、やっと実感した。
こんなに辛いことはない。
幸いなことに、わたしの骨が、もう、ものすごく硬くできていて、地球のチカラを跳ねのけられる。
わたしは、不思議なのだ。こんなすごい地球のチカラを防がないと生きられないのに、どうして、ここにいるのか。お母さんは不思議に思わないのだろうか。それとも、お母さんのように大きくなったらわかるのだろうか。
今は、わたしは、生まれて４日目だ。こんな辛い所はイヤだ。水の中に帰りたい。

○わたしのコンセプトは生き残ること

わたしは、生まれてまだ４日目だが、考えるところがある。
わたしは何だ。
わたしは、明らかに、お父さんとお母さんの要請で、生まれてきた。お母さんとお父さんの向こうには、ヒトの要請がある。
地球で、人として、生きてほしいのだ。
わたしが存在する理由は、それしかない。だから、わたしは、どんなことがあっても、生き残ろうとする。そう仕組まれている。今は、わたしは、生まれて４日目だから、わたしの、そういう、生き残らないといけないことを、

お母さんと一緒にやっている気がする。
多分、お母さんだって、気がつかないだろう。いつおっぱいがつくられているのか、わからないだろう。乳房だって、女性のシンボルなのに、いきなり、わたし専用になってしまう。もともと、わたし専用なのだ。よくよく機能を調べると、わたしとのコラボレーションの結果に過ぎない。たまたま、キレイなだけだ。
今は、生まれて４日目だから、お母さんとわたしで、わたしが生き残ることをやっているが、だんだん、わたしは、わたし１人で、生き残ることをやっていかないといけない。多分、そう仕組まれている。
余計なことを考えなくていいと、時々、カミサマに言われる。余計なこととは何なのか、わたしには、まだよくわからない。

○おっぱいを飲むこと以外何もできない

わたしは、たくさんの不思議なことがある。わたしは、まだ生まれて４日目だ。
わたしは、今日はじめてわかった。わたしは、おっぱいをいっぱい飲める。お母さんも、ジャンジャン飲んで欲しいような素振りをする。
やっと、満足できた。
しかし、おかしいのだ。
わたしは、おっぱいを飲むことしかできないのではないかと思う。他にも、たくさんあるだろう。時々、声の低い人が連れてくる、獣ではないが獣のような匂いのする生き物なんかは、手か足か知らないが、わたしに触ってくる、振りほどきたいのが、わたしの手は、子宮の時代のようには、簡単には動かない。
声の低い人などは、ずっと、わたしを自分の身体のどこかに乗せていることがある。気持がワルイ。わたしは、固くなっているのだ。
わたしは、イヤだと言いたいのだが、何もできない。
わたしは、おっぱいを飲むこと以外は、何もできない。
これからも、ずっとこうなのだろうか。
心配だ。

90日目だ

〇おっぱいしか口に入らない

いきなり飛んで申し訳ないが、今日は、90日目になる。わたしが生まれて90日だ。生まれて４日目までは、こまめに手紙を出していたのだが、そこから、いきなり90日になる。手紙を書いていないわけではない。おもしろくないとわたしは思うから飛ばした。

わたしの口の話しだが、わたしの口は、おかしい。ずっとおかしい。時々、声の低い人が、お母さんがいない時に、スプーンで何かを食べさせようとする。なにかよくわからない。

わたしの口は、不思議な反応をした。

わたしがやっているのではないが、スプーンを、舌で押し出した。

キライなのかと声の低い人は言った。

わたしがキライとかそういうことではなくて、口が勝手にスプーンを押し出す。時々フォークにリンゴを刺してくれるのだが、これも、わたしの舌が押し出す。りんごはほっぺに触ると、わたしの口は、りんごを摂りに行くのだが、りんごを、舌が押し出す。

お母さんは、慣れてきて、わたしのほっぺでもどこでも、乳首を触れさせると、わたしは、おっぱいがどこにあるかわかるので、口を乳首に移動させる。スムースに、おっぱいを飲むことができるようになっている。アッという間にわたしの口に、お母さんの乳首が入る。慣れたものだ。

わたしは、わたしの顔に触れたものは、なんでもおっぱいだと思ってしまう。わたしは、おっぱいがすべてなのだ。

ただ、顔に触れたものが、ホントに乳首であるとは限らない。時々、声の低い人の手であったりする。わたしは、舌で押し出す。

わたしは、口の中へは、乳首以外の形状のものは、入れないようにしている。わたしがやっているわけではない。わたしの口が勝手にやっている。

すごい不思議だ。

多分、わたしが、おっぱい以外のものを食べたり飲んだりしないようにして

いるのだと思う。わたしに言えばいいのだが、わたしはまだ頼りない。口は、自分で勝手に守っている。
不思議だ。

○よだれがやたら出る

今日は生まれて93日目だ。
わたしの口は、ちょっと変わってきた。
口に入るものは、乳首の形状のもの以外は、舌が押し出していた。
ここにきて、わたしの口から、大量によだれが流れてきた。わたしにもよくわからない。
同時に、いままで、乳首形状のものしか口に入れなかったのに、いろんなものを口に入れるようになった。自分のことなのに、口が勝手にやっていることを、こうして手紙にすることが、不思議だ。
お母さんは、わたしが、なんでも口に入れるのを、止めさせようとする。
出しなさいと怒られる。
食べるわけではないのだ。わたしは、味がわかる。お腹も空いていない。だから食べるわけではない。しかし、おかしいことが起きる。口に入れていたら、いつの間にか、ノドの奥に入ってしまう。それがよくわからない。
わたしは、おもしろいことに気がついた。
フォークを口に入れると、フォークのカタチが理解できるのだ。スプーンだってわかる。なんだって、カタチが理解できる。目も見えないことはないのだが、はっきりしない。お母さんの手だって、口に入れると、固い部分と柔らかい部分に分かれていることが分かる。おもしろい。
唇がセンサーの密度が１番高いと本に出ていたと、声の低い人が言った。
わたしは、ものを調べていたのだ。口で、調べていた。食べるわけではない。
お母さんは、ガラス玉などがあると、慌てて隠した。わたしは、ガラス玉は食べない。

○口の改造

わたしは、最近、けっこう必死だ。
誰かがわたしに言っている。お母さんではない。
おっぱいばかりでは生きられない。おっぱい以外のものも食べられるように、口を改造しろ。
おかしなことだ。おっぱい以外はゼッタイに口に入れなかったのに、口が勝手にやっていたのに、どこからか声がして、なんでも食べられるようにしろと言っている。どうすればいいのかわからない。
口の改造とは何だ。
最近、唇がおかしい。おかしいというか、唇で触ると、何であるのか、よくわかる。
唇は、おかしなものだ。多分、唇は、わたしの口の中だ。なにか食べる時に便利なように、少し、はみ出したのだろう。わたしではなくて、口が勝手にやった。
こうすると、いきなり、口の中に熱い食べ物をいれなくてもよい。唇で、一旦感じて、どうするか考えればよい。唇は、口だから。
ほんの少し前まで、唇は、おっぱいを飲む時に、空気が漏れないように栓をするしか、役がなかった。
ところが、やはり、重要な役があったのだ。だから口なのに、外に出した。口が勝手にやった。
昨日、お母さんが、ストローだと言って、わたしにくわえさせた。わたしは、まだ唇が自在ではない。ストローはうまく使えなかった。ついつい、おっぱいを飲むようにしてしまう。けっこう難しい。
次の日だった、声の低い人が、スプーンで、何かを食べさせようとした。わたしは、スプーンのまま、舌で押し出してしまった。
この子豆腐が嫌いなんだ。
そうではなくて、今日は、わたしは、機嫌がよくない。朝からお母さんがいないのだ。今日は、口を改造するように言われているけど、何もする気がしない。おっぱいはない。調乳ミルクらしい。飲めないことはない。味がキライなわけではない。お母さんの匂いがしないから好きではない。お腹が空くから仕方がない。

〇おっぱいを飲むと眠くなる

わたしはいっぱい不思議なことがある。

わたしは、おっぱいを飲みはじめると、すぐに眠りたくなって眠ってしまう。時々、まだおっぱいを飲みたいのに眠ってしまうことがある。

困る。

寝ないでおっぱい飲んで〜とお母さんは言う、そう言われてみても、わたしは、眠ってしまう。

わたしがおっぱいを探す時、わたしのドックンドックンは大きくなっている。わたしはけっこう必死である。

どこも行かないから〜なにやってんの〜とお母さんは、慌てているわたしを、たしなめる。それでも、わたしは必死なのだ。おっぱいにありつけなかったら、わたしは生きられない。

おっぱいを飲みはじめてしばらくすると、わたしのドックンドックンは、静かになる。急に静かになる。

そしてわたしは、眠くなってしまう。

だから、わたしは、おっぱいを飲みはじめたら一気に飲んでしまわないとヤバイのだ。

わたしは、不思議だが、わたしがおかしいわけではないと思う。フツウだろう。わたしは、生き残ることがコンセプトだ。わたしは、生き残ることだったら何でもする。そのためには、食べないといけない。わたしは、今は、お母さんのおっぱいが唯一の食べ物だ。わたしは、まだ身体が思うように動かないが、それでも、お母さんのおっぱいを探して行く。

わたしには、火事場のバカチカラが必要だ。わたしが、食糧を得るためのチカラだ。わたしは、動けなくても動く。

しかし、火事場のバカチカラは身体への負担が大きい。いつも使うものではない。ごはんが得られれば、もう必要はない。次のごはんまで、火事場のバカチカラは必要ない。

わたしは、ゆったりするのだが、究極は眠ることだ。わたしは、安心して眠ってしまう。

交感神経と副交感神経がもうあるんだろうねと、知らないおじさんが来て

言っていた。

〇身体が固くて丸い

わたしは、生まれる時、固くて丸くなった。そうしないと、あの狭い所を通れなかったからだ。
わたしは、固くなることは、少しはなくなった。時々、知らない匂いのキツイ人に抱かれて固くなることがあるが、それは、生まれる時の、身体が固くなったのではないようだ。
わたしは、なかなか、手が拓かない。ずっとグーを続けている。足だって、足のヒラに向かって、丸めようとしている。
時々、お母さんが、リラックスしなさいのような仕草をするが、わたしは、応じることができない。
この出産の時の、固くなって丸くなってしまうクセは、ずっと続くのだろうか。
お母さんは、時々ジャンケンをしている。わたしは、人は、グーを出す確率が高いと思う。わたしを見てればわかる。
わたしは、丸くなりたいのだ。

〇わたしの泣き声

わたしは、声の低い人を、時々キライになる。
なんで泣いているんだ〜と、お母さんに不満を言っている。
わたしの泣き声のことだ。
わたしは、声の低い人に遠慮して泣かないようにすることなどない。わたしは、お母さんが必要な時に、泣いているのだ。泣いているというか、お母さんを呼んでいる。
わたしは、まだお母さんが話しているようには、話せない。わたしがお母さんを呼ぶ時は、泣くしかないのだ。
その声が、けっこう、すごいらしい。
あたりまえだ。わたしは、わたしを連れ去るかもしれないワシの羽音を学んでいるし、わたしを食べるかもしれない獣の匂いも学んでいる。危ない時

は、泣けと教わっている。そのとおりにしているのだ。
お腹が空いても泣く。とにかく、お母さんが来て欲しい時に泣く。
ちょっと待ってね〜ごはんやってるから〜では困る。なによりも優先してくれないと困る。何よりも緊急の声を出さないといけない。おまわりさんのサイレンよりも緊急の音だ。
わたしは、どうしたら、おまわりさんのサイレンよりも緊急な音が出せるか、教わっている。
実験するまでもない。
コンサートやお芝居で、わたしが泣きはじめたら、ケータイどころではない。すべて止まってしまう。
それくらいに、わたしの泣き声はすごい。わたしは教わっているのだ。
わたしの泣き声は、鼻からしか出ない。鼻から出る音は、狼の遠吠えも同じだが、人に気持ちがワルイ。ゆらがないからだ。

〇夜泣き

ヒトは弱いから、最初は、夜行性だったんだと思います。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが言った。
わたしは、昼とか夜とか、よくわかってきている。明るいのが昼で暗いのが夜だ。
わたしは、暗い時に動くのだろうか。
生まれてしばらくは、夜行性だと思って付き合った方が諦めがつきます。
時々来て、お母さんにおかしなことを言うおじさんが、おかしいことを言っている。諦めがつくとはなんだ。
オレ明日大事な会議があるから隣で寝る。
時々、声の低い人は、こう言う。よくわからないが、暗い時に寝ることが習慣のようだ。わたしは、自分でよくわからない。
わたしは、昼寝て夜起きるのだろうか。
お母さんは、時々来て、わけのわからないことを言うおじさんのことばを聞いて、どういうわけだかわからないが、お昼に、わたしと一緒に寝ていることが多くなった。

わたしは、声の低い人の夜でも、おっぱいが飲みたくなる。一応、お母さんを呼ぶのだが、なかなか気がついてくれない。わたしは、泣く。すごい声らしいので、飛び起きてしまうらしい。
睡眠不足だよ。
声の低い人は、いつもこう言う。
お母さんは、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんの話しを聞いて、言わなくなった。睡眠不足とは言わなくなった。
わたしは、ホントに夜行性なのだろう。
多分、そうだ。

〇わたしのなみだ

わたしは、すごい音で泣くのだが、なみだとは異なっている。時々大声で泣いてなみだが目に溢れるが、なみだを流したいから泣いているわけではない。お母さんに来て欲しいから泣いているのだ。泣いているというより、呼んでいる。
わたしは、なみだが、まだよくわかっていない。
なぜかというと、わたしが少しなみだを溜めていると、お母さんのなみだが溢れる。
わたしのなみだは、お母さんのなみだなのだ。
お母さんだって辛いことがたくさんあるだろう。うれしいこともたくさんあるだろう。特に、わたしが元気に産まれたりしたら、なみだが溢れた。
しかし、わたしは関係ない。おかあさんのなみだは、わたしのなみだではない。
しかし、わたしのなみだは、お母さんのなみだだ。
なみだは、こころを愛で溢れさせたい時の武器なんです。知らないおじさんが、おかしなことを言っていた。このおじさんは、時々来ては、お母さんに、わけのわからないことを言う。
時々、お母さんがいないことがある。
急にお母さんの声がして匂いがすると、わたしは、なみだを流すことがある。なぜだかわからない。悔しかったのかもしれない。お母さんは、わたし

のなみだなのに、自分のなみだが止まらなくなる。
不思議なのだ。
わたしとお母さんは、何かで結ばっているから、こうなるのだろう。わたしが悔しいと、お母さんのなみだが溢れる。
わたしがうれしくても、お母さんのなみだが溢れる。

生まれて１５０日になった

〇喉を下に伸ばすように指示された

わたしは、生まれて１５０日になった。
わたしは、またしても、何かを改造するように、言われている。今度は、喉だ。
生まれて90日目に指示されたのは、おっぱい専用の口を、いろんなものが入っても拒否しないように、改造することだった。
どっちかというと、ソフトに近い。
今度は、喉を下に広げるようにという指示だ。
これはタイヘンなことだ。ハードの改造を伴う。
どうすればいいのかわからない。
わたしはさっぱりわからない。もちろん、お母さんもわからない。
人間だけが首を下に伸ばすんです。時々来て、お母さんにわけのわからないことを言うおじさんが、お母さんに、言っている。お母さんが、わたしと同じくらいに話しかけている、イヌも、首がないのだろうか。わたしは、目が見えるようになったのだが、まだはっきりしない。おっぱいなども、お母さんの乳首が黒くなかったら、わからない。
わたしは、喉を下に伸ばしているのだろうか。自分ではわからない。どうして人間だけが、こうなっているのかもわからない。こんな難しいことを、わたしに指示されても困る。
喉が下に伸びたら、きっと、わたしは、おっぱいを飲むことに困るのではないかと、心配している。大丈夫だろうか。

〇おっぱいにむせる時がある

案の定、わたしは、時々、おっぱいを飲んでいる時に、むせるようになった。何かよくわからない。
お母さんだって、なにしてんの？と心配そうにわたしを見る。そんなこと、わたしに聞かれてもわからない。

わたしは、喉を下に伸ばせと指示されてた時に、心配したのだ。
喉を下に伸ばしたら、鼻からの息が、口から飲んでいるおっぱいと重なるのではないかと心配したのだ。
おっぱいが食道に入っているのに、空気が気道に入ったら、あたりまえだが、むせる。まだ、完全には、喉は下に伸びてはいないのだろう。時々むせるのだ。
この先どうなるのだろう。
多分、わたしは、おっぱいを飲んでいて、一旦中止をしないといけないだろう。息をしないといけないからだ。昔は、遊び飲みと言っていたと、お母さんにおかしなことを言うおじさんが言っていた。遊んでいるわけではない。息をしているからおっぱいを飲まないでいるのだ。口から乳首を離さないで、おっぱいを飲むことだけを休止している。こうしないと、おっぱいが、すべて気道に入ってしまう。
多分、これは、練習しないとできないだろうと思う。
またやっかなことが出てきた。
メンドーだ。

○飲み込む

これは嚥下ができるようになったことです。
時々来ては、お母さんにわけのわからないことを言っているおじさんが言った。
嚥下って何ですか？とお母さんが聞いている。多分、わたしは、飲み込むことができるようになったのだ。
おかしな話だ。わたしは、生まれてずっとおっぱいを飲んでいたのだから、おっぱいを飲み込んでいた。それなのに、飲み込むことができるようになったと言われるのだろうか。嚥下だが。
喉頭蓋が、呼吸をする時は、食道を閉めて気道を開けて、食べ物を飲み込む時は、気道を閉めて食道を開けることが、嚥下です。時々来ては、おかあさんにわけのわからないことを言うおじさんが、難しいことを言っていた。わたしは、そうだと言うのだが、お母さんには、わからないだろう。

それにしても、この、わけのわからないおじさんは、なんでわたしのことに、詳しいのだろう。
わたしは、多分、おっぱい以外の食べ物も食べる準備をしているのだと思う。
生まれて90日頃に、口を改造しろと指示された。１５０日になって、喉を下に伸ばせと指示された。
わたしが改造の作業をしているわけではないが、多分、わたしの喉は、下に伸びている。だから、わたしは、嚥下ができるようになったのだ。

〇口でも息ができるようになった

わたしは、今日、不思議なことに気がついた。
鼻が調子が良くない。お母さんに、鼻の掃除をしてもらいたい。わたしは、鼻でしか息ができないから、鼻が詰まったら死んでしまう。泣いてお母さんを呼んだ。
お母さんは、慌ててやってきて、鼻が詰まったの〜と言って、メンボーで、鼻をキレイにしてくれた。
おかしなことに、口からも息が入ってきた。
鼻は、なんだか、曲がりくねっていて空気の通りがワルそうだが、口は何もないから、いきなり空気が気道に入ってくる。ラクはラクだ。
不思議だけど、新しいことができるようになったことがわかった。
人間だけが、口でも呼吸ができるようになるんです。ネコでも馬でも豹でも、一生、口で呼吸はできません。人間だけです。時々やって来ては、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが言った。
口で呼吸ができることは、話しができることを意味しますから、この子は、もうすぐ、話せるようになります。話すということは、口から息が出ることです。
この、時々来ては、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、なんなんだ。
わたしが、もうすぐ話せるようになると言っている。
口でも呼吸ができることは、便利なのですが、本義ではありません。話せる

ようにしたいだけなのです。本当は、口ではなくて、話せる穴があるといいのですが、もう１つ穴があったら、バランスがワルイので、話すことと食べることを兼務したのです。だから、口で息はできるのですが、口で息をしてはいけません。時々来て、お母さんにおかしなことを言うおじさんが、ホントにおかしなことを言った。

わたしは、けっこう苦労していたのだ。鼻が詰まると、ホントに苦しい。泣いてお母さんを呼ぶのだが、お母さんが、おっぱいかと思って、鼻の掃除をしてくれない時がある。

わたしは、ホントに、苦しくなる。

なのに、口で呼吸ができるけど、口では呼吸をさせるなと言っている。お母さんに言ってもムダだろう。わたしだ。

肺は１００％水でできているから、乾燥した空気を、曲がった鼻で湿らせて肺に、入れている。口では、そんなことできないから、ダメだ。鼻には鼻毛があるから、花粉やウイルスをストップしてくれるが、口は何もないから、いきなり、花粉やウイルスが、肺に入ってしまう。鼻水には、免疫もあるから、ウイルスを退治する可能性が高い。

お母さんに、時々来ては、わけのわからないこと言うおじさんが、もっと、わけのわからないことを言った。

お母さんは、ポカンと聞いていたが、わたしはわかった。

そうなんだ。

○口から声が出る

わたしは目が見えるようになって、声の低い人の顔を、だいぶ前から覚えている。

お父さんがいいと言っている。

わたしが、その声の低い人をどう呼ぶかを、お母さんと、その声が低い人が話している。

バッカじゃないかと思う。

わたしがどう呼ぶかなのに、２人で相談しているのだ。

わたしは、急に、口から声が出ていることがあって、自分でも驚いている。

お母さんを呼ぶ時も、泣かなくても声を出せばよい場合だってあることがわかった。
な〜に？と言って、お母さんはやってくる。
わたしが泣いている時よりは、慌てていない。
ちょっと待ってよ〜お茶碗洗ってるからとか言っている。
お母さんは、わたしが口から声を出しはじめて、わたしに話しかけることが多くなった。
いままでは、わたしに話しかけるより、イヌに話しかける方が多かった。イヌは、わたしより反応がいいのだろう。待ってて！とか怒っている。わたしには、そんな言い方はしない。わたしは、まだ寝てばかりだ。
でも、最近は、な〜に？と言って話しかけてくる。イヌほどではないが。
ホントは、わたしは、前から、お母さんがもっとわたしに話しかけてほしいと思っていた。わたしが子宮にいた時代もだ。わたしは、いつもお母さんを感じていたいのに、お母さんは、わたしに話しかけてくれない。
不思議だ。
最近は、いいけど。

〇首が長くなった

この子首ができたみたい。
お母さんがおかしなことを言っている。
わたしの首は、前からあった。
首が少し長くなったと言うのだったら、そうかもしれないと思う。
わたしは、首が長くなったのだと思う。首を伸ばすことができる。お母さんが見えなければ、反対側に首を動かして、見ることができるようになった。
お父さんがいるのだが、あんまり興味はない。
最近、お母さんは、わたしを連れて出かけることが多くなった。毎日のように出かける。買い物らしい。
わたしは、なんか、車がついている動くものに乗せられている。太陽がまぶしくてあんまり好きではない。空しか見えない。時々、知らないおばさんが顔を覗ける。

かわいいじゃない。
わたしのことを、決まってこう言う。
わたしは、かわいいらしい。
首はすわってるんだよね？
お母さんは、わたしのことが自慢なのだ。
時々、自動車に乗って出かけることがある。
わたしの首が長くなったことで、お母さんは、急に、わたしに安心感を持ったようだ。どこにも連れて行く。お父さんも一緒に行くことも多くなった。

〇おっぱい以外の食べ物を食べた

わたしは、イスのようなところに座らされた。タオルのようなモノをクビから巻かれた。
本に書いてあるとおりにやったんだけど。
わたしは、はじめて、おっぱい以外のものを食べるようだ。お母さんはそう思っているが、時々、お父さんが、豆腐をわたしの口に入れる。お母さんは知らない。もう何回もある。最近は、けっこうおいしいのではないかと、わたしも思ってしまう。
ごはんだからね〜。
わたしは、もう、スプーンが口に入ってきても、スプーンを舌で押し出すことはない。わたしは、わたしの口を改造している。わたしは、おっぱいも飲めるし、ごはんも食べられる。
離乳食って〜５か月からって書いてあるんだけど〜なんでだろうね。
お父さんは、知らん顔をしている。わたしは、豆腐を、かなり前から食べている。
ごはんの味は、お母さんのおっぱいの味に似ている。これだったら、毎日食べても、イヤにはならない気がする。
タンパクがダメらしいんだよね。
硬いものがダメなんじゃないのか。
それもあるけど。
お母さんとお父さんは、あんまりわかっていない気がする。

わたしは、消化ができないから、タンパクはシンドイのだ。アミノ酸に分解できない。分解できなければ、タンパクだから、細菌でも来たのかと思って、わたしの免疫が、拒否する。
お母さんは、お米なら平気だからと、自分に言っている。わたしに言わないといけない。
わたしは、はじめておっぱい以外の食べ物を食べたこともあるが、はじめてイスに座った。けっこう、首もしっかりしている。首も長くなった。グラグラしない。
哺乳ビンのようなモノに、なにか入れて持ってきた。
オレンジ絞ったんだけどね。
お父さんに話さないでわたしに話して欲しい。お父さんなんかなにもわからない。
オレンジは、生まれる前から知っている。これは少しすっぱいけど安心だからと教わっている。わたしに心地よい。実に心地よい。匂いだ。
この子オレンジ好きみたい。
お母さんは、何もわからない。好きそうな態度をしてあげないとわからない。

〇離乳食

お母さんは、ベビーフードをたくさん買って来た。
食べるの少しだし、ペーストにするのメンドーなんだよね。どうしてこういう話しをお父さんにするのかわからない。お父さんがわたしのごはんをつくるわけではない。
わたしは、お母さんに教えてあげたい。煮込みの料理っていっぱいあると思うんだけど。そこにごはんでも少し入れて柔らかくしたら、それでいいんだけど。
うどんでもいいし。
わたしは５か月からおっぱい以外の食べ物を食べているけど、まだ歯がない。おかしなもんだ。
どうしてこうなっているのだろう。

そもそも、離乳ということばがおかしい。
昔は、お母さんのおっぱいの栄養が少なかったから、早めにごはんを食べさせたんですよ。
時々来ては、お母さんに、わけのわからないことを話すおじさんが言った。
昔ってなんのことか聞きたかったが、わたしは、よくわからない。
歯がないんだから、歯が生えるまでは、おっぱいを飲んでおいてくれと、カミサマが言っていると思うと、まずいのだろうか。
わたしは、おっぱいだけで、いままで大きくなった。首も下に伸びた。でも、歯がないのに、お米を食べている。おかしいとは思う。
お母さんは、おかしいとは思わないらしい。お母さん達はみんな、５か月になったら、離乳食をはじめるらしい。ケータイで話しているし、インターネットやらで調べている。わたしは、おかしいと思うのだが、お母さんがイスに座らせてごはんをくれるので、そのままにしている。わたしの身体が拒否しているわけではないので。
歯が生えるまでおっぱいだけで育てても、なんにも変わらないと思います。
時々来て、お母さんに、おかしなことを言うおじさんが言った。
どうしてですか？
お母さんのおっぱいは、自動的に成分を変えるから。
そしたら、なんで５か月から離乳食するのが常識になるんだろう。
時々来て、お母さんにわけのわからないことを言うおじさんは、歯が生えてから、おっぱい以外の食べ物を食べても平気だと言っていた。でも、お母さんは、そういう勇気はない。他と違うコトをする勇気はない。みんなに聞いて、本をいっぱい調べて、５か月になったら、わたしに、おっぱい以外の食べ物を食べさせると決めている。
わたしは、歯がないのにおかしいと思うんだけど。
少し前まで４カ月で離乳食だったんだけど〜あれは何ですか？
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、なんだろう。
アレルギーに配慮したからでしょ？
昔は、栄養不良でお母さんのおっぱいがダメだったけど、今は、あかちゃんのお腹が完成していないのに、おっぱい以外のものを食べることが早くなっ

たからでしょ？。りんごジュースなんか、３か月からとか言っている商品もあったんです。
わたしは、わたしに誰も聞かないで、よくわからないまま、勝手に決めて、みんなで守っているのが、よくわからない。
りんごにもタンパクがあるのか。

〇お母さんのおっぱいは変化する

これは、私が調べたんじゃないけど、公表されているものです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、お母さんに紙を見せている。
ふ〜ん〜おっぱいの成分は変化するんだ。
考えてみれば、あたりまえだ。
わたしとお母さんは、ずっと、見えないところで、コラボレーションしてきた。お母さんのおっぱいの成分と、わたしの身体が大きくなることが、コラボレーションしていないわけがない。
わたしは、もう６０００ｇを越えている。６０００ｇを越えているから、口でも呼吸ができると、時々来て、お母さんに、わけのわからない話しをするおじさんが言っていたが、わたしは、生まれた時は２５００ｇだった。もう２倍以上もある。おっぱいの成分が変わらなかったら、わたしは、２倍もおっぱいを飲まないといけない。そんなに飲めない。お腹がブクブクになってしまうし、お母さんもタイヘンだ。
わたしは、ますますわからなくなってきた。
なんで歯がないのに、５か月から離乳食を食べないといけないのだろう。お母さんのおっぱいの成分が変わるのだったら、それでいいではないか。わたしは、まだ、お母さんのおっぱいだけでもいいではないか。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、だから、わたしに離乳食を食べさせるのを、止めさせようとしているわけではないようだった。
あなた知ってた？
夜になって、お母さんがお父さんに聞いていた。

お父さんが、こんなことを知っているわけがないのに、お母さんは、何でもお父さんに聞く。
次の日から、わたしの離乳食は、けっこう手抜きになったのではないかと思う。わたしのために離乳食器が使われている形跡がない。お母さんとお父さんのごはんから取り分けるようになった。
そして、おっぱいはおっぱいで飲んでいる。
おっぱいは、わたしが欲しいと言っている。わたしは、水の替わりにおっぱいを飲んでいる。

〇寝返り

わたしは背中が痛い。いつも、お母さんは、背中を下に寝かせる。イヤになって、動いてみた。グルっと回って、うまくいくかと思った。わたしの手がジャマをして、わたしは、背中を上にできない。
おかしなことになっている。
身体は、もう回っているのに、手がジャマをするのだ。わたしは、反対に回ってみようと思った。
反対に回っても、今度は、逆の手が、わたしが回るのをジャマするのだ。
どうなっているのだ。
大昔、樹から草原に降りてきて、危ないからほら穴や崖で眠ったのだろうけど、常に傾斜があって、ゴロゴロ転がったんだろけど、手が常に、ブレーキをかけたんでしょうね。
時々来ては、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、誰に言うわけでもなく、わたしが必死になっているのを見て言った。
わたしは、しばらく、止めた。
わたしは、平らな所で寝ている。
わたしは、手を折りたためばいいことに気がついた。ほっておくと、手が出てしまう。
いきなり、わたしは、回れた。はじめて背中を上にできた。頭が重い。頭を支えたことがなかった。頭が重くて垂れ下がる。
疲れて、ベターとなってしまう。腹ばいになる。

どうしたの〜なにやってんの〜。
ダメじゃない〜。
お父さんがやったと思って、お母さんは、お父さんを怒っている。お父さんは、そばにいたが多分サッカーの試合を見ていた。何が起こったかわからない。お母さんに怒られても、反応ができない。
背中が痛くならないから、グルッと回ることはグッドなのだが、頭が重いことが気に入らない。
次の日だった、
お母さんは、わたしのおむつを替えていた。
どうぞ〜気持ちよくなったでしょ〜。
わたしは、一気に、手を折りたたんで、グルッと回った。
え〜ウソでしょ？。
お母さんが、そう言ってくれると、わたしはうれしい。はじめておっぱいを飲んだ時も、うれしいそうだった。はじめてごはんを食べた時も、うれしそうだった。
しかし、わたしが寝返ったら、ウソでしょ？と言った。
よっぽどうれしかったのだ。このことが、そんなにうれしいことなのか、わたしにはよくわからない。

○体重が毎日30ｇ以上増えている
わたしは、身体がしっかりしてきた。寝返りができるようになって思った。もう６０００ｇだから。
わたしが大きくなって安心しているのだろう。
お母さんは、毎日体重計にわたしを乗せていた。毎日、体重を記録していた。
身長が測れないんだよね。
わたしは、まだ丸くなっている。きおつけして！とか、お母さんに言われるのだが、寝たまままきをつけなどできない。それもあるが、わたしは、まだ丸くなるクセが取れていない。
お母さんは、わたしの膝を伸ばして、身長を測る。

だいたいしか測れないわよ。
わたしに言っているのか、自分に言っているのか、よくわからない。そして、記録する。
最近は、毎日測らなくなった。
わたしは、丸くかわいくなってきている。あかちゃんぽくなってきている。
離乳食をはじめて、太ってきている気がする。
お母さんは、必死になって、昔の体系に帰ろうとしている。ダイエットしている。しかし、わたしには、バンバン食べさせる。
お母さんは、ミトコンドリアのことなど忘れたのだろうか。ダイエットだけだ。確かに、食べなかったら痩せることは間違いはない。お母さんは、わたしの体重を測る時、必ず自分の体重を測る。そして記録している。
お母さんは、どうして痩せようとするのだろう。不思議だ。

〇おむつを替えてくれ

平気〜オシッコだから。
おむつを替えてくれそうになっているお父さんに、お母さんが言った。
わたしには、よくわからない。オシッコだったらおむつを替えてくれないのがわからない。
どうしてオシッコってわかるんだ？
ブルってするから。
わたしのサインを読むのはかまわないが、ウンチだったらおむつを取り替えるけど、オシッコだったら、おむつを取り替えないというのは、困る。
オシッコでおむつ取り替えてくれないと、すごい気持ちがワルイ。わざと、ウンチのように、顔を赤くしてみる。
なんだ〜ウンチじゃないの〜。
お願いだから、濡れたままのおむつをしないで。
排泄機能は、自動的にできてくるものですが、排泄したままがイヤだと感じていることが大事です。
時々来ては、お母さんに、何かわけのわからないことを言うおじさんの言ってることは、理にかなっている。

わたしは、イヤなのだ。しかし、最近、ガマンをするようになっている。
諦めると、排泄機能ができても、生活習慣が伴いにくいかもしれません。
時々来ては、お母さんに、何かわけのわからないことを言うおじさんの言うとおりだ。わたしが、濡れたおむつをガマンして、それに慣れてくると、多分、ずっと、わたしは、トイレに行かないかもしれない。
太郎だってトイレ行くからさ〜。
なんのことを言っているのかわからない。多分、イヌの名前が太郎だ。イヌはトイレに行くらしい。ヤバイではないか。

○豆腐を食べるとヤバイ
あんたかゆいの？
お母さんは、わたしのことを、あんたと言う。名前があるのに、どういうわけだ。
かゆい。
お母さんは、わたしの爪を切っている。肌が破れると困るからだろう。わたしが、肌を掻くからだ。
豆腐が好きだって言ってたけど。
時々来ては、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、お母さんに聞いた。
いつから豆腐を食べているのですか？
最近だと思う。
ウソだ。ずっと前から、お父さんが、豆腐を何度もわたしに食べさせていた。豆腐は、つるっとお腹に入ってしまう。
他に何が好きな食べ物はありませんか？
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが聞いていた。
ごはんだけど。
ごはんはいいです。
牛乳は飲ましたことはありません。
しばらく〜大豆を止めてみましょう。

味噌汁は毎日飲むけど、止めるんですか？
ええ
この、時々来て、お母さんに、わけのわからないことをいうおじさんは、なんなんだ。わたしの食べるものにも、ケチをつけるのか。
今日から、わたしは、つるっとしておいしい豆腐が食べられない。
夜になって、お父さんが驚いた。
豆腐を止めるのか。
最近食べはじめたばかりなのに、どうしてアレルギーになったのか、わたしわかんない。
もしかして、オレかもしれない。
お母さんは、泣きはじめた。
わたしは、どうしていいかわからなかった。
他に何か食べさせた？
刺身とか食べさせなかった？
牛乳は？
お母さんは、泣きながらお父さんに聞いていた。
わたしが一番よく知っている。わたしが、前からお父さんに食べさせられているのは、豆腐だけだ。
豆腐なんか、お母さんだってお父さんだって、毎日食べているのに、どうしてわたしはダメなのだろう。
わたしの胃とか腸が不完全の時から、豆腐を食べたからに違いない。
それからしばらく、わたしは、豆腐を食べていない。わたしは、忘れた。わたしは、ブツブツができなくなった。痒くなくなった。

○ハイハイをはじめた

あんたハイハイできるようになりそうね。
お母さんが、わたしのことを言っているらしいのだが、あんたとはなんだ。
時々、イヌにもあんたと言っているから、わけがわからない。
しばらくして、わたしは、イヌを見ていて、閃いた。手が前足なのだ。わたしは足が長いから、足は、膝を使うと、ピッタリする。

心臓で１３０くらいの血圧を出さないと、頭脳で90にならないんです。
時々来て、お母さんにおかしなことを言うおじさんが言っていた。
それほど、地球のチカラは大きいんです。たった、心臓と頭脳の距離だと思っても、重力に逆らって、血液を心臓から頭脳に上げないといけないのです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、更におかしなことを言った。お母さんは、じっ聞いていたが、わかったのだろうか。
豹の方が人間より理にかなっているんです。
地球と平行に脊柱があるんです。
人間は、地球と垂直に脊柱があるんです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、更に、おかしなことを言っている。
人は、どうしても、一旦、ハイハイを経由する必要があるのです。ハイハイだと、心臓と頭脳の重力差がないからです。いきなり、心臓と頭脳の重力差を与えないことが好ましいのです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、ホントに、わけがわからない。
そしたら、ハイハイしたままがいいではないか。
おかしなことを言う。
とにかく、わたしは、ハイハイしている。ハイハイが得意になるだろう。イヌはわたしのお手本だ。ホントに上手だ。

○どうして立ちあがったのか

わたしは、不思議なことが多い。
ハイハイは上手になったが、お母さんは、ハイハイしていない。お母さんがハイハイしているのを見たことがない。わたしがハイハイのお手本にしたのは、イヌだ。
わたしは、いずれ、立ち上がるのだろう。イヌとわたしは、違う生き物に違いない。わたしは、お母さんとお父さんのようになるのだろう。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言っているおじさんに、聞

いてみたい。
なんでわたしは立ち上がるのか。
ハイハイだけじゃつまんないだろうにね。
お母さんが、おかしなことを言った。わたしが、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんに聞いてみたかったことだ。
つまんないのか。
わたしはまだ立ち上がっていないから、立ち上がると、何がおもしろいのかわからない。
また、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが来た。
立ち上がると、前足がヒマになるから、手になったんですよ。手になると、足より細かいことができるから、頭脳とフィットするんです。
まったくわけのわからないことを言う。わたしは、歩くのを犠牲にして、前足を手にしたのか。そういえば、最近、手が頻繁に動くようになってきた。

〇ボーロを自分で食べた
丸い食べ物で口に入れると溶ける食べ物がある。おいしいし、お母さんが、口に入れてくれる。
さっき、はじめて、自分で口に入れた。自分の手で、ボーロを口に入れた。お母さんは、ケータイで誰かと話しをしている。
不思議なことに気がついた。手は長くなっていて、下にあるボーロを摘まめる。クレーンのようになっている。手が動きはじめて気がついた。真っ直ぐ伸ばすと、かなりのところまで伸びる。わたしの手は、生まれる時に丸くなっていたクセが、少しとれてきているようだ。わたしは、肘をたたまないと、口に、うまくボーロが入らない。でも、肘は、たためるようになっている。手は、親指と他の４つの指が向きあっているから、ボーロを摘まみやすくなっている。
うまくできている。
手は、わたしが、自分で食事ができるように、自分で調整してくれたのだと思う。

お母さんがいるから安心とか、思わない方が無難だ。いつ、獣に襲われるかわからない。わたしは、ボーロをはじめて自分で食べた。自信が出てきた。残念だが、ボーロが、口の近くまでは簡単に持って行けるのだが、なかなか、口に入らない。
これはなんだ。
お母さんを見ていると、りんごをボーロのように持って、口に入れている。わたしのように、口に入らずに苦労している素振りはない。
また、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが言った。
口と手の協調をこれから学習しますから。
誰に言っているのだ。
こんなことは、お母さんに言っても、お母さんは何もわからない。
わたしに言わないといけない。
何度も練習すればできるようになると言わないといけない。
協調ができないのか。
それにしても、手は、よくできている。わたしは、食いっぱぐれしないと思う。右と左に手があるから。
お母さんが食べているリンゴだって食べられる。
あんたボーロどこにやったの？
食べたに決まっているのだが、お母さんは、わたしのおむつの下とかを探す。わたしは、自分の手でボーロを食べられる。
わたしは、まだおかしいと思う。
手でボーロを摘まみたいのだが、小指と親指でしかボーロを摘まめない。人差し指の方が親指と近いのに、人差し指は、うまく動かない。どうなっているんだ。
外側から中心に向かって発育するんです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、また、わけのわからないことを言っている。
骨盤とか頭とか中心に近い部位は、大きくしてあるんです。外側は、生まれて、どんどん大きくなるし、機能も発達が早いんです。
なにを言っているのか、ゼンゼンわからない。

親指は、中心だと言っているらしい。親指は、大きくして生まれているらしい。確かに、骨盤も、お母さんとあんまり変わらないくらいある。身長はわたしは小さいが。
手は、小指からよく動くようになるらしい。カミサマが決めているんだろう。それで、わたしは、人差し指でボーロが摘まめない。小指と親指でボーロを掴む。摘まめないが掴める。
わたしは、口に入れるのに苦労する。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、笑って見ている。こっちは、ボーロが、なかなか口に入らないでイライラしているのに、アタマにくる。

〇夜眠れるようになった
最近、お父さんも同じ部屋で眠ることが多くなった。
もう夜泣かないのかな〜。
わたしのワルクチを言うクセは治らない。
わたしは、夜泣いていたのかもしれないが、よく覚えていない。
わたしは、夜行性かもしれないと、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが言っていた。最近は、夜は起きなくなった。
どういうわけだか、明るい光があると、目が覚める。
わたしは、夜行性から昼行性に変化したらしい。
わたしは、自分が進化してきた過程は、子宮の時に終えたと思っていたのに、違うのだろうか。それとも、夜行性と昼行性は、生まれた後に進化をたどるようになっているのだろうか。よくわからない。
とにかく、わたしは、明るくなると、目が覚めるようになった。
生物時計が動きはじめています。
時々来て、おかあさんに、わけのわからないことを言うおじさんが言った。
生物時計ってなんだ。
人には、３つの時計が組み込まれています。
頭脳の時計が中心で、食べ物を食べないと生き残れないので、胃腸に２つ目の時計があります。３つ目は、肌にあります。昼行性だからでしょう。目覚

めないといけない。
この、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、ホントに、わけがわからない。
わたしは、いままでは何だったのか。夜泣きすると、お父さんに嫌われていたのは何だったのか。べつに、お父さんは好きではないからいいけど。
発育したんです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが言った。
発育とはなんだ。
わたしが、生き残ろうとしていることだろう。
わたしの生物時計が動きはじめると、わたしは、昼行性だから、太陽が明るくなると、目が覚める。お昼になると、お腹が空く感じがする。夜もだ。わたしは、食べないと生き残れない。わたしの生物時計は、食べるための時計でもあるようだ。
お父さんは、わたしが昼行性になって、喜んでいる。夜泣きがないとお父さんは、夜眠れる。
わたしは関係ないが。

○はらまき

時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、おかしなものを持ってきた。
はらまきだと言った。わたしのお腹に、袋をかぶせるように巻きつけた。
どうしてこんなものをするのか、よくわからない。
生き物の主体は腸管ですが、腸管は、温度によって、温血の生き物か冷血の生き物かに分かれます。私達は、温血の生き物です。温血という意味は、どんなことがあっても、身体の中に、他の生き物を入れない意思を表します。主として微生物をです。免疫が、温度で働くという意味です。私達は、フツウであれば、身体に侵入しようとする、微生物などを、免疫で防げるのです。しかし、腸管の温度が下がってしまうと、免疫が働きません。私達の身体は、微生物で溢れてしまうのです。毒がない限り、急には、体内に侵入した微生物は、ワルさをしませんが、体温を上げると、免疫が働いて、自分の

身体を自分が攻撃することになって、ひょっとしたら、タイヘンなことになってしまいます。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんの言っていることは、ホントに、わけがわからない。
だからなんなんだ。
腸管の温度を下げないようにはらまきをするらしい。
お母さんは、理解したのだろうか。なにを言っているのか、ゼンゼンわからない。
温かいもの食べさせてくれればいいのだろう。
わたしは、知ってても、自分でごはんがつくれない。
アトピー？これ？
おかあさんが急に真剣になった。

○熱があるんじゃないか

熱があるんじゃないか？
お父さんは、３日に１度はこう言う。その度に、お母さんは、体温計でわたしの体温を測る。
わたしは、おかしいと思うのだ。わたしは、腸管がわたしだ。わたしの温度は、腸管のことをいう。
おでこを測ったり、腋の下を測ったりしている。
あかちゃんは、体積が少ないから、腸管の温度が外に出やすくなっていて、体温が高いと思われがちです。人の腸管は、３６・９度程度がフツウです。あかちゃんは、筋肉も骨も脂肪も少ないから、外まで温度伝わりやすくなっています。だから、あかちゃんは、体温が高いように見えます。逆に言うと、あかちゃんの腸管の体温は、逃げやすくなっていることになります。ミトコンドリアが多いから、ガンガン発熱するから、それでも、賄えるようにはなっていますが。
あかちゃんは、腋の下を測っても、大人よりも、高く出ます。しかも、体形がいろいろなので、腸管が３６・９度であっても、あかちゃんによって、個人差が出ます。腸管は３６・９だけど、この子の腋は、36．１度がフツウだ

といったことを、お母さんが、知っておくことが、大切です。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが言った。
調べておけばよかった。
お母さんは、今日から、毎日、朝起きたら、わたしの腋の下の温度を測るのだと言っていた。
ミトコンドリアが、少ない環境幅でしか生きられないから、腸管の温度も恒常性を保つようにできています。１度の上下も、何かあったと解釈すればいいのです。風邪ウイルスが侵入して免疫が動くと、ミトコンドリアが働くので、体温は上がります。体温を監視することは、身体に、なにかしらの、フツウではないことが起こっていると、解釈することができます。
お母さんは、もう聞いてはいないのに、わけのわからないことを言うおじさんは、熱心に話そうとする。
お母さんは、エクセルで体温の記入表をつくっている。お父さんはＡＫＢのジャンケンポン大会のニュースを見ている。なんだ〰これは。

生まれて２４０日になった

〇どうして歯が生えるのか

わたしは、最近、口の中が、ムズムズする。痒いわけではないが、おかしい。

歯が生えてきそうだよな〜乳首噛んだら痛いから。

そうなのだ。わたしは、お母さんの乳首を噛みたくなっている。口がムズムズするのだが、ほぼ、歯だ。歯がムズムズする。

わたしは、よくわからない。

わたしだけではなくて、あかちゃんは、みんなこの時期に歯が生えるようになっているのだろうか。

お母さんは、本を見ている。下２本から生えるらしい。本に書いてあるからみんな同じなんだよね。

お母さんは、別段、不思議ではないらしい。どうして、この時期に、誰もが、歯が生えるのか。

多分、意味があるのだ。

わたしは、豆腐を食べていて、今は、豆腐を食べさせてもらえない。アレルゲンだとお母さんは言っていた。歯が生えることは意味があるのだ。確かに、豆腐は、歯がなくても食べられるけど。

わたしは、困ったことになっているのだ。豆腐を食べさせてもらえない。おいしいのに。

〇わたしはスリッパが好きだ

わたしは、お母さんの目を盗んで、スリッパをかじっている。一度見られて、取り上げられた。

ダメだからね！

スリッパをかじると、ムズムズが気持よくなるのだが、お母さんに見つかると、取り上げられることがわかった。

どうしてスリッパをかじったらダメなのだろう。

あんたまたスリッパかじったでしょ？わかるんだからね？
あんた食べてるの？ボロボロじゃない。
バッチーんだから〜なにやってんの？
次の日から、スリッパがなくなった。
困ったことになった。
テーブルをかじってみたが、あまりにも硬くて、どうにもならない。
歯と歯茎の間に、歯根膜というものがって、食べ物の硬さなどのセンサーになっているのです。ここを鍛えないと、おいしくごはんを食べることができません。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが言った。
そしたら、スリッパを復活させてほしい。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、言うばかりで、何もしてくれない。スリッパを復活させてほしい。
わたしの願いは、通じそうもない。
わたしは、自分で、何か探さないといけない。
お母さんのケータイもかじってみたが、硬い。テレビのリモコンも硬い。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、歯固めおもちゃだと言って、買ってきてくれた。これは絶好だ。どうして、早く買ってきてくれないのだろう。

〇おっぱいを飲まなくなった

おっぱいもう止めるから。
わたしが手でお母さんのおっぱいを探していたら、いきなり、おかしなことを言った。
お母さんの乳首は、ずっと、傷ができていた。わたしが噛むからだろうか。
時々、クスリ塗ってるからダメと言って、わたしは、哺乳ビンで、ミルクを飲まされた。
クスリのいいのがないんだよね〜あんたが口にするからさ〜。
もう、耐えかねたのだろうか。
わたしは、コップで水も飲める。スープだって飲める。時々は、おっぱいを

忘れることがある。
おっぱいは、お母さんだ。お母さんがソバにいると安心できる。子宮の時に教わっていた、わたしを襲う獣は、ここまでは現れなかった。これから先が危険なのかもしれないが、とにかく、お母さんは、わたしを守ってくれた。そのお母さんを感じることができるおっぱいを止めると言っている。
抵抗しないといけない。
ダメダメと言っているが、３回に１回は、おっぱいを飲ませてくれる。お母さんの弱みはわかっている。
今日、わたしは、お母さんのおっぱいを飲んだかどうか、よく覚えていない。多分、わたしは忘れていくのだろう。わたしは、お腹は空くからお母さんのおっぱいを飲みたいわけではない。お母さんが近くにいて欲しいだけだ。
お母さんは上手だ。わたしの興味がある事を次々に示してくる。昨日だって、ティッシュペーパーを全部引き出しても何も言わかなった。おもしろい。わたしは、おっぱいを思い出すヒマがない。

〇人みしり

あんたどうしたの？大家さんのおばさんじゃない。
わたしは、身体が動くようになった。ハイハイだってできる。お母さんは、わたしを散歩に連れて行く、わたしは、外の方が気持ちがいい時もある。
わたしは、子宮の時代に、生まれたら喰われることに注意しろと教わったことが、トラウマになっている。最近、目がよく見えるようになって、いろいろなことがわかってきた。１番確実なのは、お母さんの匂いを覚えろだった。
お母さんは、子宮の時代から、わたしを守った。唯一のわたしの味方だ。わたしは、なにかあれば、泣けばよかった。お母さんが、なにをさておいても、すぐに来てくれた。お母さん以外は、わたしは、わたしを襲う生き物かどうか判断できなかった。幼い頃、いまでも幼いが、わたしは、誰かに触られるとビクついていたものだ。
基本的に、わたしは、恐い所に出てしまった。それでも、わたしのコンセプ

トは、生き残ることだから、わたしはガンバル。しかし、お母さんがいなかったら、わたしは、萎える。ガンバレないわけではないが、わたしは、士気が落ちる。おかしな言い方だが、そうだ。
最近は、なんでも見えるようになって、身体も動くようになって、イヤだったらイヤだと表現できるようになった。前は、イヤでも、ガマンしないとしようがなかった。
大家さんのおばさんは、はじめて見た。
とりあえず、お母さんにくっついていようと思う。安心なのだ。
わたしは、お母さんが、わたしを紹介してくれるといいのにと思う。最初からわたしを差し出さないでほしい。わたしを紹介して、おばさんを紹介してほしい。
そしたら、少しは、わたしは安心する。
お母さんは、食物連鎖の頂点に立った人かもしれないが、わたしは、食物連鎖の中にいる。まだ出会ってはいないが、子宮の時代に、わたしを食べる獣の匂いを、シミュレーションした。
まだ、わたしは、捕食される側なのだ。
なんでも恐がるのはあたりまえだろう。

〇ミッキーマウスのように

わたしは、ハイハイが得意だ。お母さんが歩くのと変わらないスピードだ。膝が破れて、お母さんが、膝当てをしてくれた。それでも、イヌの方が速くて、気に入らない。
お母さんがおかしをくれる時は、わたしは、わたしのテーブルに座る。わたしのテーブルよりは、お母さんとお父さんのテーブルの方に、おいしそうなものがいっぱいある。おもしろそうなものもある。
なんとか、お母さんとお父さんのテーブルの上に行きたいのだが、時々抱っこされて見るくらいのものだ。
わたしは、手が、思ったより使えるようになっている。
イスに掴まって、手のチカラで、立ち上がった。
イスの周りをグルッと歩いてみた。

イスはいいのだが、イスの上には何もない。テーブルの上に行きたいのだ。テーブルの上に行こうと思うと、このイスの上に登らないと、難しいだろう。
しばらく考えたが、今は、できそうもない。とにかく、イスを手で掴んで立ちあがることはできた。
ミッキーマウスをディズニーが描いたように、足がデカイんです。親指などは、大人の80％くらいあるんです。できるだけ早く立ち上がれるように、指が大きいんです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、わたしを見ていて、言った。
お母さんはいないのに、独り言を言っている。
晩ごはんを食べて、お母さんは、洗い物をしていた。わたしは、今日、はじめて、牛の乳というものを飲んだ。おいしくないわけではない。
わたしは、イスを掴んで、つかまって立った。テーブルの上のりんごを食べたいのだ。どうしていいかわからないが、とにかく、イスまでは、これる。
あんた何やってるの〜。
わたしには名前があるのだが、お母さんは、最近、わたしのことを、あんたとしか呼ばない。
ちょっと見て？。
お父さんを呼んでいる。
わたしが、イスの周りを歩いているのを見ている。喜んでいるようだ。
生きないといけないから、食べないといけないから、口が最初に発育するんです。次に、生きることで便利なのは、手を発育させることです。手が発育すると、自分で食べ物を口に運べますし、自分で、食べ物を探せます。冷蔵庫を自分で開けられれば、生き残れます。次に、生きることに便利なのは、足を発育させることです。歩ければ、隣の家の冷蔵庫まで行けるかもしれない。昔だったら、隣の森のりんごを食べに行けるかもしれない。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、またおかしなことを言っている。
また来ます。
それだけ言うと、どこかに行ってしまった。

１才になった

○プールで泳いではじめてわかった

わたしは１才になった。
お母さんが通っているプールに連れて行かれた。
いきなりすごく冷たい水の中に入れられた。こんなのははじめてだ。わたしは、37度くらいの子宮の水の中に10カ月もいた。最近、やっと、水がない所で生きることに慣れてきた。時々、寒い日もある。
しかし、この水の冷たさはなんだろう。身体が一気に冷たくなる。これでは、身体に良くないのではないかと思う。
あんた震えてるの？
わたしには名前がある。あんたではない。しかし、震えが止まらない。寒いのだ。
わたしは、ジャグジーに連れて行かれた。温かい。
しばらくすると、またプールに連れて行かれた。わたしは、一瞬息が止まる。寒いのだ。
不思議なことに、しばらくすると、身体が温かくなってきた。
あんまりムリをしない方がいい。ミトコンドリアは、温度差に弱いから、ミトコンドリアが死んでしまったら困る。しかし、基本的には、プールで冷たい水に入ると、ミトコンドリアは、ガンバルから、強くなる。乾布マサツや寒中水泳と同じことだけど。しかし、今は、ムリしない方がいい。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、こんな所にも来るのか。
わたしは、おかしいと思う。
水の中に10か月もいたのだが、息が苦しい。水の中では息ができない。昔は、どうしてたんだろう。
お母さんが一瞬手を離すと、わたしは、下に落ちてしまう。わたしは、子宮では、浮いていたと思っていた。わたしは沈む。わたしは、水の中でも、よく見える。向こうのおばさんが歩いているのが見える。けっこうおもしろい

が、息が苦しくなる。
大丈夫？
わたしは平気である。
こんだけ泳いでるんだけど体重が減らないんだよね。
お母さんがお父さんに言っている。
冷たい水に入るから、ミトコンドリアは強くなっている。少しの運動でも、体温を高くできる。エネルギーを消費できる。泳いでいたり、上でバイクやったら、必ず、脂肪は少なくなります。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、まだいた。
この子保育園にお願いして、わたし、仕事に復帰しようかな。大丈夫そうだから。そしたら、一気に、体重が戻るかも。
わたしは、時々、お父さんに抱かれて水の中にいる。
お父さんは、わたしがよくわからない。水の中にいたいのに、わたしを胸のとこで抱いている。どうかしている。
わたしは、いろいろわかってきた。

○どうして陸に上がったかわかった

わたしは、プールに行きはじめて、やっとわかった。どうして、わたしは、安全な水から陸に上がったのか。
水の中では、動けない。よく見えるし、匂いもわかるし、じっとしていると、気持はいいのだが、動けない。動こうとすると、すごい圧力がある。すぐそこのお母さんの所にだって行かれない。
子宮の時には気づかなかった。
わたしは、ハイハイすれば、少々遠い所にも行ける。今は、壁伝いにお母さんのところまで歩いて行ける。
あんたハイハイしてくればいいじゃない。
わたしは、あんたではない。
わたしは、よく動けるのだ。わたしは、お母さんとお父さんのテーブルの上に、まだ上がれない。おもしろそうなものがいっぱいある。どうすれば、

テーブルに上がれるか考えているが、アイデアがない。まず、イスに座って、イスに立ち上がらないといけない。
挑戦してみたが、イスに座ることがタイヘンである。
やっぱり、プールよりおもしろい。水の中よりおもしろい。それなのに、なんでお母さんは、自分もだが、わたしをプールに連れて行くのだろう。
ホントは、毎日プールに行くことが好ましいです。水の中では、重力が１／６になるので、いきなり、ラクになります。身体がラクになります。腰が痛かったり肩がこっていたら、それは、重力だと思っても間違いはありません。
今日のお昼に、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、またおかしなことを言っていた。
やっぱり、陸に上がると、動けておもしろいけど、重力とかの危険がいっぱいなんだろう。

〇わたしの生き残るコンセプト

わたしは、すごい地震があってたくさんの人が亡くなったという話しを、お母さんとお父さんがしているのを、聞いていた。
子ども達がかわいそうだよね。お母さんは、わたしが、まだ１才だからだろうが、子どものことばかりに目が行くようだ。
わたしは、不思議に思うのだ。わたしは、たとえ、辛いことがあっても、わたしのコンセプトを放棄したりしない。
わたしのコンセプトは、生き残ることだ。
子ども達の笑顔が救いだよねと、お父さんが言っている。
笑顔をつくっているわけではない。どんなに辛いことがあったとしても、わたしは、わたしのコンセプトを外さない。わたしは、必ず、生き残るように、仕組まれている。
だから、地震で辛いことが多くなった子ども達だって、必ず、立ち直れる。
それは、自動的に立ち直ることに似ている。
わたしは、まだ１歳だが、わたしと同じだから、地震で辛い思いをしている子ども達のこころがわかる。

辛いからと言って、生き残ることを放棄したりはしない。たとえ、食べるものがなくて、お店に並んでいるものを、黙って持ってこようとも、子どもは、生き残る方を選択する。
お母さんやお父さんは、そんな恥ずかしい思いをするのだったというような、バカなことを考えそうだ。どんなに恥ずかしいことであっても、生き残る天秤に敵うことはないと、１才のわたしは思う。

〇手が５円がわかるようになった
わたしの手は不思議だ。
わたしの手は、お母さんのおっぱいを探しに行く。見なくても、手が教えてくれる。お母さんの乳首がわかる。
ダメだからね。
わたしは、見なくても、手で何でもわかるようになった。お母さんには言ってないが、わたしは、コインの違いがわかる。いろいろあって、難しそうだが、違いはわかる、孔があいているコインもあるのだが、見なくても、触っただけでわかる。
わたしの目は、まだ、遠くのものと近くものの区別ができない。はっきりしないのだ。わたしは、指の方が正確だ。何でも触って確かめたくなる。
人の触覚のユニットは、唇が１番密度が濃くて、次が指先です。３番目が足の指です。
時々来て、お母さんにわけのわからないことを言うおじさんが言った。
人は、最初は、匂いでいろんなことを判断して、次に触ることで、いろんなことを判断して、そして、目でいろんなことを判断しはじめます。人間だけが３段階になっています。他の生き物は、匂いで、判断することが多いのです。
この、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、何だろう。ホントに、わけがわからない。
鳥は、目じゃないんですか？
お母さんが突っ込んだ。
鳥は、匂いから目に、２段階で行くんでしょうね。

鳥には手があるんだろうか。わたしは、まだ鳥がわからない。

〇丸で柔らかいもの

この子は、アタマが良くなるんだろうな〜。

時々来て、お母さんに、わけのわからないこと言うおじさんは、わたしを見て、お母さんに言っていた。

手は頭脳の飛び出たものだから、手の動きを見ればわかります。

わたしは、聞こえないフリをしているが、聞こえている。聞こえてはいるが、意味がわからない。

わたしは、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが持ってきた、柔らかいおもちゃが好きだ。

こんなの売ってるんですか？

これは私がつくったものです。

おもちゃではないようだ。

なにがおもしろいかというと、柔らかいから、カタチを自由に変えることができることだ。

子どもにとってのモノは、柔らかいものしか経験したことがありません。子宮の時代からずっとです。お母さんのおっぱいが典型です。しかも、すべて、カタチが丸です。お母さんのおっぱいもカタチが丸です。自分のカタチも、ある方向から見れば、みんな丸です。直線がどこにもありません。直線は、工業が発達して、人が開発したものです。子どもには、違和感があります。

時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、たまには、いいことも言う。

わたしは、やわらかいボールを、次の日に買ってもらった。わたしは、まだうまく投げられないが、イヌと一緒に、柔らかいボールで遊ぶことが多くなった。

〇手は頭脳の代理をやっている

わたしは、生まれて３８０日になった。

お母さんは、もう、わたしのことが、よくわからなくなっている。おっぱいから離れたせいもあるかもしれない。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんに、電話して聞いたりしている。
手には、片手に少なくとも、多くのユニットがあるのではないかと思っています。指に集中しています。ユニットはありますが、発火しているかどうかわかりません。発火とは、頭脳と繋がることです。すべて、発火していなければ、15歳くらいで世界のゴルフの大会で優勝したりしないでしょう。すべてのユニットを発火させようと思ったら、モノに触ることです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんの話しを、お母さんは、真剣に聞くようになった。
砂場はバッチーからダメだと言っていたお母さんは、次の日から、砂場にわたしを連れて行った。
あの、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、砂がいいと言ったのだ。
わたしは、砂場に行ってみてわかった。グッドなのだ。砂は、粒が小さいから、手の中の、どこにも接するだろう。わたしは、お母さんに黙って、靴下も脱いでいる。
砂は、わたしは、おもしろい。
わたしが１番おもしろいと思うのは、水だ。水は、予測のつかない動きをするからおもしろいのだと思う。次くらいに砂場がおもしろい。バッチーとは何だろうか。こんなにおもしろいのに。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが言った。
子どもは、エントロピーが小さいものが好きなんです。18か月まで。
ゼンゼン意味がわからない。お母さんだって意味がわからない。
粒々の小さいのがいいの？
次の日、お母さんは、パンをつくる時、わたしを呼んだ。わたしは、全身真っ白になったが、おもしろかった。
お母さんは、変わってきた。

〇まだ遠近がはっきりしない

あんたこれパンにして。

お母さんがこう言った時、わたしは、おかしいと思った。わたしは、パンがどんなものか知らないし、カタチをつくれない。

わたしは、手前の粉の塊と、向こうの粉の塊が、どっちが手前にあるのかわからない。

なのに、お母さんは、また、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんに電話した。

個人差もあるんだろうけど、18か月くらいまで、子どもは、構成することができません。目がよく機能していないこともあります。積木も18カ月くらいまでは、壊すことしかできません。積木で自動車をつくることができません。個人差もあるのでしょうが。だから、まだ３８０日では、パンをつくることはおもしろいのですが、パンをカタチつくれません。18か月まで、そこは、お母さんがやればいいことです。

お母さんは、わたしの目が、完全に機能していないことを知らない。わたしは、うまくできているのだ。わたしが、今歩いたら危ない。自転車にぶつかってしまう。わたしは、まだ伝え歩きしかできない。

わたしは、よくできているのだ。プログラムが素晴らしい。カミサマがやっているとしか思えない。

パンを焼いたのだが、お母さんは、お皿にパンを１つ乗せてくれるようになった。

そうなのだ。わたしは、２つ乗せてあったら、うまく掴めない。

〇お母さんをお手本にしている

わたしは、イヌを真似てハイハイをした。わたしは、今は、もうハイハイはしない。イヌは、ずっとハイハイのままだ。わたしは、お手本がいないとなにもできない。わたしは、学習しているに違いなのだが、お手本がないとダメだ。

わたしは、最近、フォークが使えるようになった。ジャガイモを刺して食べる。お母さんを見ていた。やっとできるようになった。スプーンも、お母さ

んを見ていて学習した。なんでもだ。お母さんを見ていて学習する。
最近、テレビのチャンネルを変えられるようになった。これは、お父さんをよく見ていた。お父さんは、次々にチャンネルを変えるクセがある。
けっこう、いろいろ変わっておもしろい。
わたしが、今学習しているのは、歩くことだ。
わたしは、伝え歩きをしていて、お母さんがいないと、４歩くらい、自分で歩ける。手がしっかりしているので、倒れても、また、そこから立ち上がれそうだ。
昨日までは、何かモノに頼らないと、立ち上がれなかった。お母さんは、何も頼らないで立ち上がる。よいしょとは言うが。わたしは言わない。
お母さんもお父さんも、わたしがお手本にしていることを、知らない。
歯みがきしなさい？。
わたしは、おかしいと思うのだ。お母さんと一緒だからね〜と言えばいいのに。わたしは、お母さんをお手本にしているのだ。
わたしは、箸を使いたいのだが、どうにもならない。これはすごい難しいことがわかっている。お母さんの箸は、キレイに動くが、お父さんの箸は、すごくおかしい動きをする。キレイではない。お父さんの箸をお手本にはできないと思う。
歩き方も、お父さんの歩き方は、好きではない。音がするから好きではない。お母さんにも、時々言われている。
もっと静かに歩いてよ〜この子起きるわよ。
お母さんがお手本になるのだろう。

〇歩くリズムを間違わない

わたしは、不思議に思っていることがたくさんある。
わたしは、今日は、５歩前に歩いた。
お母さんは、お父さんに電話していた。
そんなにうれしいことなのだろうか。
わたしが不思議に思っていることは、イヌだ。
イヌは足が、どういうわけだか多い。不思議なのは、足が地面に着く順番を

間違えないことだ。
わたしは、もうすぐバンバン歩くから、イヌをよく見ている。どう見ていても、足の順番を間違えない。
わたしは、イヌのようにはできそうもない。すごいと思う。もちろん、お母さんもよく見ている。
足がゴチャゴチャになった〜とか言うのを、聞いたことがない。
わたしは、不思議だと思う。
脊髄動物というのは、生き残るために、ゼッタイ間違えてはいけないことを、頭脳に任せていないんです。脊髄が覚えてしまうのです。頭脳はあやふやだから危険です。イヌが歩く時、向こうから自転車が来て、慌てて４足がゴチャゴチャになったら、それだけで、事故になります。頭脳はアテにはできません。こういうものは、脊髄が覚えてしまうのです。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、またおかしなことを言いはじめた。
頭脳がアテにならないとはどういうことだろう。
わたしも、５歩歩いたが、考えて歩いているわけではない。考えないようにしているのかもしれない。考えると間違えるのか。
確かに、イヌだって、考えているようには思えない。
嚥下の機能だって同じです。脊髄動物には、たくさんのものがあります。嚥下ってなんだ。
わたし自転車にずっと乗ったことがないけど乗れるんですか？
お母さんが突っ込んだ。
頭脳が考えて自転車に乗ったら危なくて仕方がないでしょ？。確かに、右から車が来たら、大脳が判断しないといけないし、身体を左に避けることは小脳が判断しないといけないんだけど、ブレーキとかペダルの感覚は、大脳も小脳も関与しません。
お母さんは、もっと突っ込みたかったらしいのだが、お父さんが帰ってきて、止めた。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、なんなんだ。

〇小指はバランスの指

このベビーシューズ返してきて。

今日、お父さんが、わたしのシューズを買って来た。

わたしは、バカだと思うのだ。お母さんは、わたしとお父さんと３人で買いに行きたいに決まっている。

どうしてこういうことがわからないのだろう。お父さんに、知らせてあげたいが、知らせる方法がない。

わたしは、お父さんが、あんまり好きではない。それでも、うれしそうに箱を開けて、わたしにシューズを履かせてくれるのを見ていると、ワルクないと思ってしまう。

それでも、お母さんに怒られて、箱をしまってしまう。

だいいちさ〜シューズは足に合わせないとダメだよ。

駅の向こうのシューズやさん？

明日行こう？３人で。

どうせこうなることがわかっているのに、バッカじゃないかと思う。

お母さんは、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんに、聞いているのだ。

親指が大人の80％くらいあります。小指も80％くらいあります。

わたしの足は、おかしな足なのだ。わたしではない。あかちゃんは、みんな同じらしい。

早く歩けるようにしたいんだろう。生き残るために、わたしの親指は、デカくして生まれてくる。

親指は、踏み出しの指で、小指は、バランスの指です。

この、時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんは、なんなんだ。

お母さんはベビーシューズをずっと見ている。

なんか〜いいのないね。

お父さんは、なにがわたしにグッドなベビーシューズなのかよくわからない。

あんたちょっと履いてみて。

わたしは、あんたという名前なのだろうか。
結局、昨日お父さんがベビーシューズを買ったシューズ屋さんでは買わずに、ベビー専門店まで車を走らせた。
お父さんは、平謝りだった。
だって、あなたがワルイんだもん。
お母さんは、親指の大きいベビーシューズを探しているのだ。

○ローリング

２本の足で歩くと、フツウでは、竹馬になります。人は、すごい工夫をしました。身体の前にあった筋肉を、すべて後に持っていって、人という漢字のように、前に歩いても、後に倒れないようにしました。
２つ目の工夫は、足の裏を、踵から着地して、グルッと親指まで回して、親指で踏み切ることを、工夫したことです。ローリングと言います。このことで、人は、２足歩行でも、走ることがきるようになったのです。しかし、ボルトだって、後には速く走れません。
ボルトってなんだ。
時々来て、お母さんに、わけのわからないことを言うおじさんが、またおかしなことを言った。
お母さんは、最近は、おじさんの言うことを真剣に聞いている。
わたしは、ベビーシューズを買ったものの、外ではまだ歩いたことがない。
家の中で、何度も倒れながら、それでも、けっこう歩けるようになった。
あんた、このシューズ履いてみて。
新しいシューズをお母さんが買って来た。
シューズの底が薄いのがないんだよね。
わたしは、ハダシの方が、うまく歩ける。この新しいシューズだと、ハダシと同じように、うまく歩ける。

○わたしは自分で育った

わたしは、生まれて４００日になったらしい。
わたしは、ここまで、わたしのコンセプトを貫いてきた。わたしは、生き残

ることだけが望みだ。
それが、わたしだ。
わたしは、自分で生き残らなければならないから、自分のことは自分でやる。何でも自分でやる。
子宮時代のながい旅など、わたしにしかわからない。わたしは、おっぱいを飲むことだけを完璧に学習して生まれてくる。おっぱいさえ飲めれば生き残れるからだ。おかあさんのおっぱいは、そのようにできている。お母さんは、何よりも、わたしを大事にするように、カミサマに言われている。
しかし、わたしは、自分で自分を育てている。
あんた育てるのタイヘンだよ〜。
わたしは、お母さんが言っていることは、おかしいと思う。お母さんは、わたしの世話をしてくれている。お母さんは、わたしが、必死で、口を改造することなど、知らない。わたしが、喉を下に伸ばして、スピーカーをつくっているのを知らない。お母さんが知らないことは、仕方がない。お母さんは、わたしではないから仕方がない。
でも、いかにも、わたしを育てたのは、自分のチカラだと、自慢にするのは、止めた方がいい。もっと、わたしを、尊重してほしい。あたかも、わたしが、自分の持ち物のように扱うことがあるのも、止めてほしい。
わたしは、大人の小さいものではない。わたしは、大人の未発達な人ではない。わたしは、なんでもわかっている。自分で育っている。

『あかちゃんからの手紙』

２０１１年

２０１８年

げんじあきら

『まゆ』を読んでいただきたい。

『あかちゃん１－わたしとわたし０７５』を読んでいただきたい

『あかちゃん２－わたしと私０７６』を読んでいただきたい

『あかちゃん３－わたしと私０７７』を読んでいただきたい

『自分で育つ』を読んでいただきたい

あかちゃんからの手紙

著者　　　　げんじあきら